2019年度
慶應義塾大学体育研究所
基盤研究シンポジウム
「大学体育教員の育成を考える」
報告書

慶應義塾大学体育研究所

慶應義塾大学体育研究所・（公社）全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム
「大学体育教員の育成を考える」　シンポジウム記録

発刊に寄せて

体育研究所基盤研究
第 3 班　班長　村山光義

シンポジウム開催の経緯とねらい

本シンポジウムは、2019 年 9 月に日本体育学会第 70 回大会において「大学体育教員の使命を考える～教養体育の担い手の育成に向けて～」というシンポジウムの継続として開催したものです。少子高齢化社会の到来で、大学の未来に様々な困難が待ち受ける中、大学体育の役割、その担い手の育成はどうあるべきか？　この課題について日本体育学会のシンポジウムでは、日本体育学会が「日本体育・スポーツ・健康学会」と改称される状況において、学術的な研究成果のみならず「体育」を大学で実践することの重要性が多くの会員に認識されており、特に若手研究者においても課題として共有されていることがわかりました。そして、シンポジストをお願いした、羽田貴史先生（広島大学・東北大学名誉教授、広島大学高等教育研究開発センター客員教授）、高木英樹先生（筑波大学大学院大学体育スポーツ高度化共同専攻専攻長）、鈴木宏哉先生（順天堂大学、日本体育学会若手研究者委員会委員長）と是非ともこの議論を継続的に進めたいということとなりました。

本シンポジウムは、教養教育における体育教員の育成システムについて具体的な議論をするため、全国大学体育連合（大体連）の活動について田畑亨先生（流通経済大学、全国大学体育連合常務理事）にも加わっていただきました。大体連については、若手研究者の会から、その活動に関する認知が弱く、目的などを知りたいという声がよせられていました。シンポジウムでは、筑波大学・鹿屋体育大学の大学院体育スポーツ高度化共同専攻において「大学体育教員」の博士号を認定する制度と共に、大体連が長く継続してきている大学体育指導者の研修会について紹介があり、今後の発展・活用がリンクしていくことが期待されました。また、現在の若手研究者らが抱えている教育能力育成と研究成果の両立に関する環境的問題も見えてきました。そして指定発言者をお願いした羽田先生からは、教養課程の科目特性としての体育の難しさや未来への役割について、我々が一層努力しなくてはならない現状を鋭く指摘いただきました。何よりも「大学体育」の意義を常に議論し、内外にしっかり発信できる教員集団となる必要があることを再認識いたしました。

詳細は本記録を参照願いたいと思いますが、大学体育議論を再燃させ、さらに未来を担う教員の育成にも道を切り開いていくことが重要であると考えます。今後もより具体的な内容について議論を続けていきたいと考えますので、是非ご覧いただき、忌憚のないご意見を頂戴できれば幸いです。

目次

発刊に寄せて

体育研究所基盤研究第３班　班長　　村山光義　　1

シンポジウムの趣旨およびレジュメ……3

【シンポジウム記録】

大学体育スポーツ高度化共同専攻が目指すもの……7
高木英樹（筑波大学大学院大学体育スポーツ高度化共同専攻専攻長）

全国大学体育連合における研修制度　過去・現在・未来…… 12
田畑亨（流通経済大学、全国大学体育連合常務理事）

大学体育教員へのキャリアアップに関する若手研究者の意識…… 17
鈴木宏哉（順天堂大学、日本体育学会若手研究者委員会委員長）

指定討論…… 24
羽田貴史（広島大学・東北大学名誉教授、広島大学高等教育研究開発センター客員教授）

全体討論…… 28

慶應義塾大学体育研究所・（公社）全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム

「大学体育教員の育成を考える」

シンポジウム記録

シンポジウムの趣旨およびレジュメ（パンフレット掲載内容より）

【趣旨】

少子高齢化社会の到来で、大学の未来に様々な困難が待ち受ける中、大学体育の役割、その担い手の育成はどうあるべきか？　この課題について、2019 年 9 月に日本体育学会第 70 回大会において「大学体育教員の使命を考える　～教養体育の担い手の育成に向けて～」というシンポジウムを行った。日本体育学会が「日本体育・スポーツ・健康学会」と改称される中、学術的な研究成果のみならず「体育」を大学で実践することの重要性が多くの会員に認識されており、特に若手研究者においても課題として共有されていることがわかった。本シンポジウムは上記の議論を継続し、大学体育教員の育成の場とその仕組みについて議論するものである。筑波大学・鹿屋体育大学の共同大学院の「大学体育スポーツ高度化共同専攻」の他、大学院における育成へのカリキュラムやプログラム開発の可能性、全国大学体育連合の研修プログラム・啓蒙活動の再認識と活用などについて、将来を担う若手研究者らのキャリア構築への意識や考え方を重ねて考えていきたい。

コーディネーター：村山　光義
（慶應義塾大学体育研究所）

【シンポジストならびにテーマ】

大学体育スポーツ高度化共同専攻が目指すもの

高木　英樹
（筑波大学大学院大学体育スポーツ高度化共同専攻専攻長）

【要旨】

本専攻は、大学体育や大学スポーツの充実・発展へ寄与する実践研究と、それに基づく教育実践の循環を促進できる高度専門職業人としての大学教員を育成する「共同教育プログラム」として、2012 年度から鹿屋体育大学との「共同専攻」設置に向けた検討を重ね、2016 年

図１　シンポジウムチラシ

に開設された。本専攻の特徴として、従来の研究型博士の養成を目指した専攻とは異なり、ディプロマポリシー（DP）として、1）実践的研究力、2）実践的教育力、3）コミュニケーション能力、4）国際性、5）倫理観などの幅広い知識や能力を有するものに博士（体育スポーツ学）の学位を授与するものとしている。そしてこのDPを達成するために、実践的な授業科目が開設され、これらの授業科目を3年間にわたって履修するコースワークを通して学位取得を目指すのが本専攻の特徴と言える。

本シンポジウムでは、具体的な授業内容や学生の研究テーマを通して、本専攻が目指す方向性について話題提供を行い、大学体育教員の使命や資質について様々な角度からディスカッションを深めてゆきたい。

【略歴】

高木英樹（たかぎ・ひでき） 筑波大学体育系教授、同大学大学院人間総合科学研究科大学体育スポーツ高度化共同専攻専攻長。専門競技は水球競技。研究分野は水泳の流体力学的研究。

全国大学体育連合における研修制度 過去・現在・未来

田畑　亨

（流通経済大学、全国大学体育連合常務理事）

【要旨】

公社）全国大学体育連合の活動は、1952年大学体育における教育内容や方法を協議する為に「大学体育協議会」を開催したところから始まった。この法人の活動は2019年で67年を迎える。毎年、全国研修会や指導者養成研修会、全国8つの支部が開催する研修会を通じて、大学教員の資質向上を図っている。2019年度は、本部主催研修会は2回、支部主催研修会は8回、合計10回の研修会を実施している。全国各地で定期的な研修会が開催されている一方、研修会参加者の状況を見てみると年々減少傾向にあるのも事実である。

このような状況を踏まえ本シンポジウムでは、全国大学体育連合が開催してきたこれまでの研修会制度を振り返り、今後全国大学体育連合の研修会制度が果たす使命について検討を加えていく。

【略歴】

田畑　亨（たばた・とおる） 流通経済大学スポーツ健康科学部准教授、公益社団法人全国大学体育連合常務理事・総務部副部長。

大学体育教員へのキャリアアップに関する若手研究者の意識

鈴木　宏哉

（順天堂大学、日本体育学会若手研究者委員会委員長）

【要旨】

日本体育学会では、2016年度に若手研究者委員会を設置した。これと併行して若手会員の交流を促進する若手の会（有志団体）が設立され、メーリングリストを中心に情報交流が進められている。2019年8月に若手の会のメーリングリスト登録者約450名を対象に大学教養体育や大学体育教員の養成の在り方に関する調査を実施した。高等教育機関や研究機関への就職には博士号の取得が必須となりつつある現状において、体育・スポーツの若手研究者は大学で体育・スポーツを教えることをどのように感じ、今の大学院教育をどのように感じているのだろうか。

本シンポジウムでは、若手の体育学会員の生の声を紹介し、これからの若手研究者の育成環境について議論したい。

【略歴】

鈴木宏哉（すずき・こうや） 順天堂大学スポーツ健康科学部／大学院スポーツ健康科学研究科先任准教授、日本体育学会理事、日本体育学会若手研究者委員会委員長、日本体育学会若手の会代表世話人、日本体育測定評価学会理事、日本発育発達学会監事、日本体力医学会評議員など。筑波大学大学院体育科学研究科修了、博士（体育科学）。

【指定討論者】

羽田　貴史

（広島大学・東北大学名誉教授、広島大学高等教育研究開発センター客員教授）

【略歴】

羽田貴史（はた・たかし） 福島大学教育学部助教授、広島大学高等教育研究開発センター教授、東北大学高度教養教育・学生支援機構教授、同副機構長、東北大学大学教育支援センター長などを歴任。日本高等教育学会理事。専門は高等教育論。

【シンポジウム記録】

村山光義（慶應義塾大学体育研究所）：これより慶應義塾大学体育研究所・全国大学体育連合関東支部共催シンポジウム「大学体育教員の育成を考える」を始めさせていただきます。

私、本日コーディネーター役で進行いたします慶應義塾大学体育研究所の村山と申します。宜しくお願いします。

本日はご案内のように大学体育という枠において教員の育成をどのようにしていくかというお話ですが、皆様ご承知のようにこの問題については2019年9月の日本体育学会で私がコーディネーターをさせていただいてシンポジウムを開きました。本日お話しいただくディスカッサントの羽田先生、筑波大学の高木先生、順天堂大学の鈴木先生と既に一度体育学会に際してこういった問題はいかがかという問題提起をさせていただきました。本日は一歩進めた議論ということですが、当日お見えにならなかった方もいらっしゃるかと思いますので、これについて簡単に触れたいと思います。具体的に一歩進める前段階として、そもそも大学体育という枠で教員を育てる、大学体育の課題が学会で議論されるということがここ数年なかったので、学術的な価値として研究をするという集団の中で、我々大学で仕事をしている身として、いわゆる教養体育の担い手を今後どのように育てるのか、このことは問題ではないかということを提起したわけです。これは学会の際にも提起をしたのですけれど

村山光義氏

問題提起・危機意識

現在から未来に、（日本体育学会において）学術的探究以外に「大学体育」という枠組みや個々の教育能力の向上といった点が議論できるか？

大学体育を担う人材の育成システムを考える必要はないか？

図2

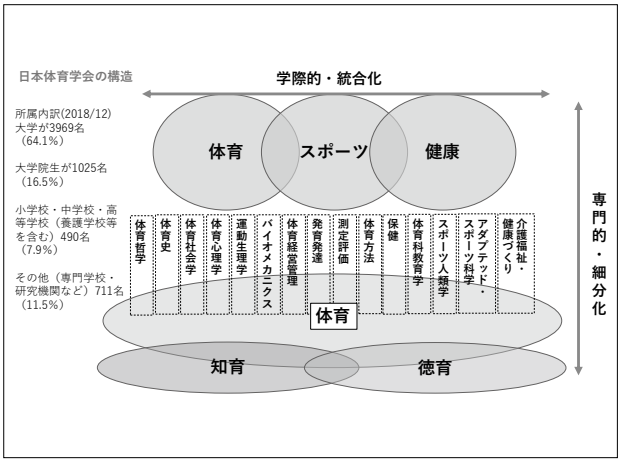

図3

も（図3）、体育学会が「体育・スポーツ・健康学会」に名前を変えていく中で専門の15分野では研究者として自分の専門に特化し、それを深く掘り下げる若者たちが学位を取ってその人たちの集まりとして新しい体育・スポーツ・健康学会ができると思います。しかしこの中に体育という枠があり、もともと体育学だったわけですけれども果たして体育という言葉で生き残ることができるのか？　学会にはいわゆる大学で仕事をする人が大変多くて大学院生も一定数16％の方に入っていただいているわけですが、我々は教養体育の現場で仕事をしていまして、こちらから今後そういった学会の学術を担っていく人たちに我々の分野にもっと力を貸してくれるのかということが問題ではないか？　専門だけ深く議論していったときに大学体育は議論できないのかということでありました。そういうシンポジウムをしましたら、問題であると言ってくださる方がかなりいました。そこで本日は更に何か育成のことを考えようではないかと考えました。学部があって大学院があります（図4）。我々

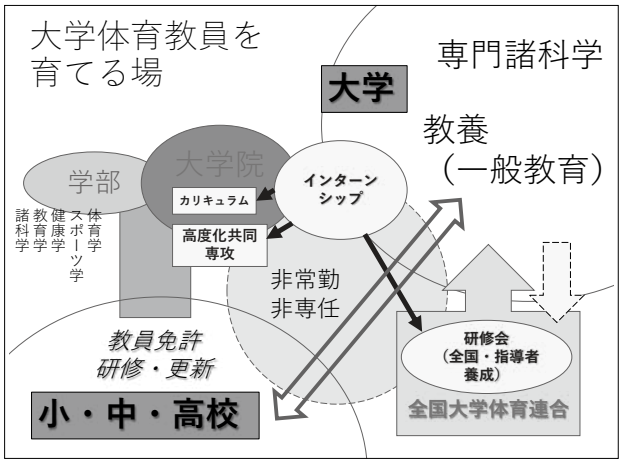

図 4

は大学の方にいて教養の一般体育という立場にいて、学部、大学院を通過してくる人たちが我々の力に何年後か、なっていくという構図を考えなくてはならないわけです。本日は筑波大学と鹿屋体育大学の高度化共同専攻のお話を高木先生に引きつづきご紹介いただきます。大学院で何か育てるというカリキュラムがあるとまずは良いということが議論になるかと思います。このあたりは羽田先生からも大学という枠でどのようなものかご意見がいただけると思います。本日はもう一つこの共催シンポジウムの母体の大学体育連合というもの、これが近年若い先生方にはよく知られていないということも踏まえて、研修会、全国体育指導者、若手の指導者養成、こういったことをずっとやってきていただいています。これについては田畑先生から実情と過去及び未来についてお話を頂きます。この大学体育連合には我々も大学として関わっているわけです。ですから若い人たちだけの問題ではありません。更に小中高との連携も重要で大学を卒業すると教員免許をいろいろな科目で取得できるわけです。大学だけ免許がないわけですが、大学院へ行く前にすでに学部を出て教員免許を取るという人はたくさんいましてここに教育の趣旨というものがあるわけです。これを大学だけ別だという風に考えるのもどうかなということがあります。ここまでお話が延びるか分かりませんが、これらを繋ぐような仕組みが作れないかというのが本日のステップアップのポイントにあるかと思います。長くなりましたが、このように体育学会から引き続きの議論を皆様と共にしたいということで早速シンポジストのお話を頂きたいと思います。それでは高木先生お願い致します。

シンポジストのご紹介は配布の資料の方にございます。割愛させていただきますが、鹿屋体育大学と筑波大学での大学体育スポーツ高度化共同専攻として新しい学位を作るということがございますのでこの話を高木先生宜しくお願いいたします。

大学体育スポーツ高度化共同専攻が目指すもの

高木英樹（筑波大学大学院大学体育スポーツ高度化共同専攻専攻長）：皆様こんにちは。ご紹介いただきました筑波大学の高木でございます。先ほどございましたように体育学会でも同様の話題提起をさせていただきました。そのためお話しする内容はほぼ一緒でございますが、本日はよりコアな方がいらっしゃると思いますので大学体育に問題意識を持っていらっしゃる或いはここには大学院生も来ていますけれども僕の職どうなるのですかという切実な話もあると思います。本日は 20 分ほど私が何を専攻していて何を目指してやっているのかというようなことをご紹介させていただいて、この後の討論、話題提起をさせていただけたらという風に思います。まず、大学体育スポーツ高度化共同専攻、長ったらしいのですがなぜこの専攻を作ったかというと従来とは異なる方向性を持った大学教員養成課程を過程として、皆様学位持っている方もいらっしゃるかと思いますが恐らくは研究をして peer review の雑誌に投稿して accept する、そして学位を持ってというようなことだと思うのですがまさにそうやって従来は研究を中心に学位を取られた方がそのあと大学で職を得てというようなことでそれとは異なる大学教員の養成課程を作ろうということであります。従来の研究に重点を置いて研究学位を取って大学で職を得て、いわゆる一般体育、教養体育を教える、そういう方がいらっしゃる、これを従来の博士としましょう。多様な人材が大学の体育の授業を担当しています。中には

高木英樹氏

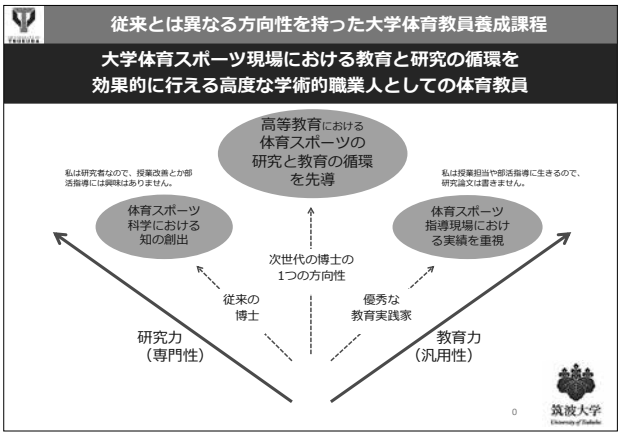

図 5

図 6

教育力重視で運動クラブの指導を中心にやっていらっしゃる、あるいは授業を専らやるという教育的なところに重きを置いて授業を展開される。二者択一ではございませんが研究志向の方が、私は研究者なのであまり授業改善や部活にはあまり関わりません、という方も中にはいらっしゃる。一方で教育、クラブ活動に重点を置かれてあまり研究をされない方もいらっしゃる。我々は野球のベースボールのフィールドに見立てておりますけれどもそうではない次世代の博士の一つの方向性として高等教育における体育スポーツの研究と教育を循環的に行えてそれを先導する人材を養成していこうというようなことで新たな博士、後期課程を作りましたということです。内容について詳しく説明させていただきます。大学体育スポーツ高度化共同専攻というのは 2016 年に開設されて先の 3 月に博士第 1 号が出ました。3 年制の博士課程です。国立大学強化事業推進事業として筑波大学と鹿屋体育大学の共同専攻として発足しました。特徴としては両大学の強みを生かして大学における体育とスポーツを包括的かつ実践的に捉えて教育研究のことを学んで

図 7

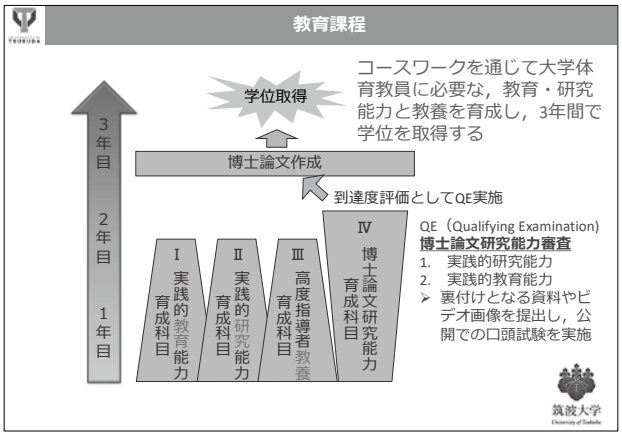

図 8

いくというものです。定員は筑波大学が 3 名、鹿屋体育大学は 2 名ということで計 5 名です。現在学年が 1 年から 3 年まで揃いまして十数名が在籍していることになります。この場に受けてみようかなという人がいる場合のために情報を提供しておきます。毎年 9 月に入試をしております。入試は書類審査、口述試験、英語の外部試験を導入しております。特に書類審査では研究計画書を重視しております。どういった内容の研究をしていくか、3 年のうちに学位論文が書けるかどうかといったことを予め書類、口述で試験をして合否を決定するということでございます。授業については鹿屋体育大学との共同専攻ですので遠隔授業システムを採用して鹿屋に本籍を置く学生は鹿屋で、筑波に本籍を置く学生は筑波にいながら両大学で開講される授業が受講できるというようなシステムとなっております。しっかりと過程を経て、学位論文を書くことで学位記が出るわけです。ここに 1 号と出ておりますが（図 7）。ここに座っている学生の名前もあるわけですけれども。博士（体育スポーツ学）という学位が授与されます。英語名は国際通用性を考慮しまして「Doctor of Philosophy in Physical Education and Sport Studies」にしております。そのため、Ph.D. と名乗っていただいて問題ないということになっております。共同専攻で両大学長名の学位が授与されるということになっております。この専攻の特徴として教育課程を図式化（図 8）しているのですがコースワークを通じて大学体育教員に必要な研究能力と教養を育成して 3 年間で学位を取得という、やはり私もそうですがいわゆる研究で学位を取ろうとすると非常に時間がかかります。工学分野で取ったもので、仕事をしながらやっていたもので非常に時間がかかりまして実は筑波に共同専攻の中に 4 つの博士の後期課程がございます。いずれも中々 3 年で学位を取りにくいということがあるのですが、我々の専攻では 1 年目 2 年目 3 年目それぞれで授業を取っていって単位を取る。その中で実践的な研究能力や教育能力を養っていって更にそれを途中評価として「Qualifying Examination（QE）」というものを実施いたします。これは欧米の大学で多く導入されているのですが、中間試験のような意味合いがあります。ただし落ちることも当然ありますし、一定の水準に達していなければ次の博士論文に進めないという関門を設けております。よく皆様から質問を受けるのですが、いわゆる peer review 付きの査読付きの論文は書かなくて良いのですかということですが、1 本はしっかりと書いてくださいということにしております。

ただしそれは実践的な研究領域で査読付きの雑誌というようなことにしておりますのであえてそこに高いハードルをつけて体育科研究でないとだめだということにはしておりません。もちろん体育科研究に投稿して accept されて学位を取られる方もいらっしゃいますが我々はやはりきちんと自創できる、研究と教育を循環的に行なえる人材かどうかをそこできちんと判定して簡単に言うと自創できる運転免許を出すというように考えております。体育論構成です。後ろの人は小さくて見えないかと思いますからざっくり言います。先ほど申しましたように毎週金曜日或いは土日に集中授業をするということで現職の教員の方も受講できるように配慮しつつ基本的には 3 つの科目群からなっております（図 9）。実践的教育能力育成科目群、実践的研究能力育成科目群、高度指導者教養育成科目群、このような中で 3 単位 3 単位 1 単位以上取得して先ほど言った「Qualifying Examination」

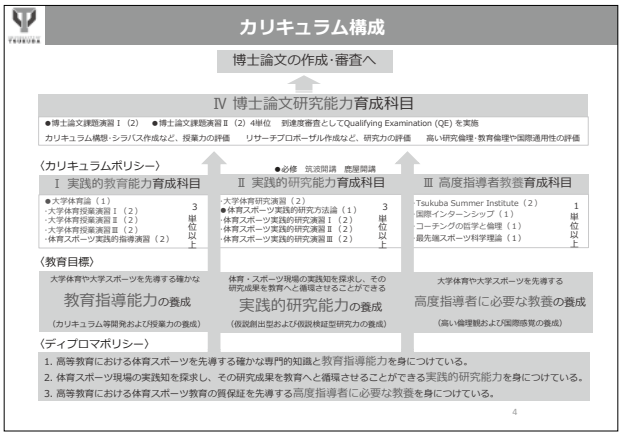

図 9

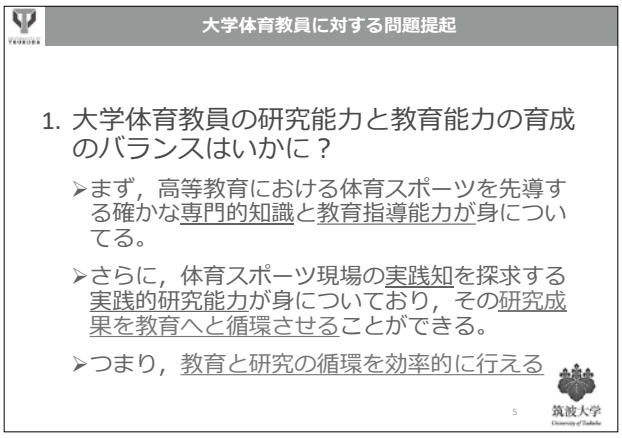

図 10

をパスすると博士論文が書ける、博士論文が予備審査、本審査を通るとめでたく学位取得ということになります。我々が専攻を作って以来、今日もいろいろな大学の先生から問題提起がありましたが、大学体育教員の研究能力と教育能力の育成のバランスはどうするのか、つまり我々が一番初めに示しました文中にあるように従来の研究主導型、教育主導型ということではなくてまずは高等教育つまり大学は高専になるので、体育スポーツを先導する確かな専門知識をしっかりと身に付けておく必要があるということに加えて教育指導能力も必要です。先ほど控室で話をしたのですけれども専門知識は身に付いたけれども教育指導能力というのは大学で赴任しちゃってからどうしようか授業をやらないといけないというようなことで実態は慌てて準備するというようなことがあるかもしれません。我々にとって体育スポーツ現場の実践値を探求するこれは大切な実践的研究能力が身に付いておりその研究成果を教育に循環させられる、我々が理想的には自分は運動生理、僕でしたらスポーツ工学をやっているのですけれども、乖離しているのですね、研

図 11

究と日々教えている私は筑波大学で水泳の一般体育の授業を持っているのですけれども、なかなかダイレクトにいきません。もちろん水泳の流体力学的な知見ということでやりますけれども、授業と研究というのは循環できるというようなことが大学体育教員に理想的な状態であるという風に考えております。授業の内容について時間があまりありませんので、かいつまんでご説明いたします。例えば実践的教育能力育成科目ではどのようなことをやっているのか（図 11）。これは大学体育論という授業名をつけておりまして必修にしております。筑波では半期 10 回の授業がありましてその中で大学体育教員に求める職能をしっかり理解するということと、例えば授業シラバスの分析、それからスポーツを通じたライフスキル教育というものを、テキストを元に学んでいきます。基本的なシラバスの作り方や授業の構成の仕方、或いは最近話題になっているライフスキル教育というものはどういう風に概念を持ってやっていったらよいか。あとは授業の評価、これは非常に重要なことですね。我々がどのように授業をするか一度も教えてもらってないのに ABC をつけております。大丈夫かな。後々様々な評価方法について勉強する機会がありますが、きちんと評価しないとやりっぱなしの授業となってしまい、要らないと言われても仕方ないかなと思ったりもします。例えば実践的教育能力育成科目で大学体育授業の演習というように呼んでおります（図 12）。これは実際に自分で授業をします。ビデオで録画しておいて体育授業の観察記録分析を通じた省察能力を高める。様々な授業分析ソフトウェアがあります。そういったものを使って自分の授業を分析すると実際に時間が学習指導にどれくらい使われていてマネジメントがどれくらいでというようなこと

図 12

図 14

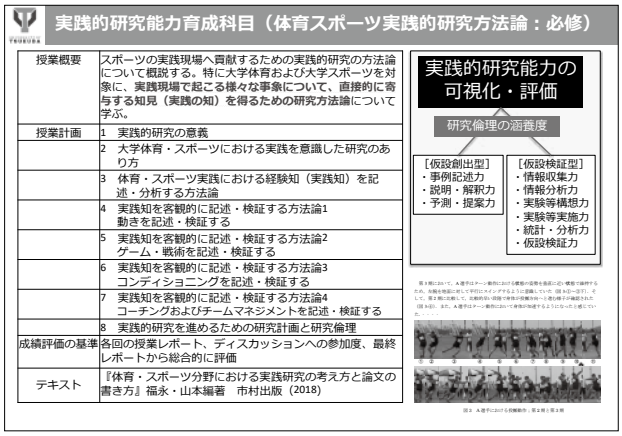

図 13

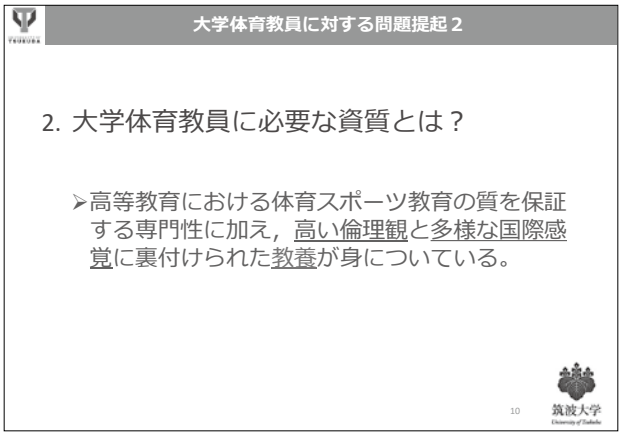

図 15

が分かります。そういったものをチャート化したりして使用前使用後のように模擬授業、基礎的なシラバスの作り方或いは授業構造について学んで授業をやってみて自分の授業はどうなっているかというものを省察して、しばらくたって例えば 1 年の後期にやって 2 年の前期に同じ分析をして比較し自分に教育能力が身に付いたかどうかを判定しております。それが、QE の重要なポイントになって実際にビデオをとって見比べて自分の授業がそれほど改善したのか、これがすべてではございません。ただし客観的な資料を元に教育能力について考えるということをしております。それ以外実践的な研究能力についてはどうするのかというと主に鹿屋体育大学の先生方がご担当いただいております。まさに実践値、現場で残っている実験室的な実験ではなくて、授業であったり、クラブ指導であったり、そういったところで起きている現象をきちんと記述検証、分析すると。それを最終的に論文にまとめられる。そういうことができると研究の結果を書くためだけに実験室で実験をするというのではなく、自分の授業がいわゆる研究の題材になる、それをまさに自分で自創できるように理論をここで学ぶ。学んでいるだけでは論文を書くことが出来ないので実際に体育スポーツの実践的研究論文を作成するプロセスをここで実習いたします。1 年生から 2 年生にかけて論文作成の手順を学んで標準的には 2 年時にいずれかの査読付きのところに投稿をします。投稿して accept までなかなかいかない場合もあるので、投稿をしたことをもって「Qualifying Examination」を受けられるというようなことにしております。例えばご紹介しているのは『スポーツパフォーマンス研究』というもので、実践的研究を主に取り上げている peer review 付きのジャーナルです。こういったところに投稿して accept されると。ということをもって最終的な学位取得の要件にしております。こういった教育と研究を循環的に行なえるということに加えて我々が重要だと考えているのは高い倫理観、これは多様な国際観に裏付けられた教養も体育教員にとっては重要なのではないかと考えておりまして（図 15）それを養成するための授業も用意しております。例えばこれはコーチングの哲学と倫理という授業でござい

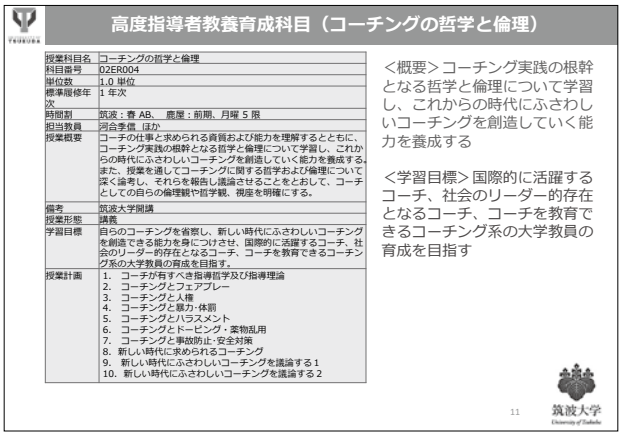

図 16

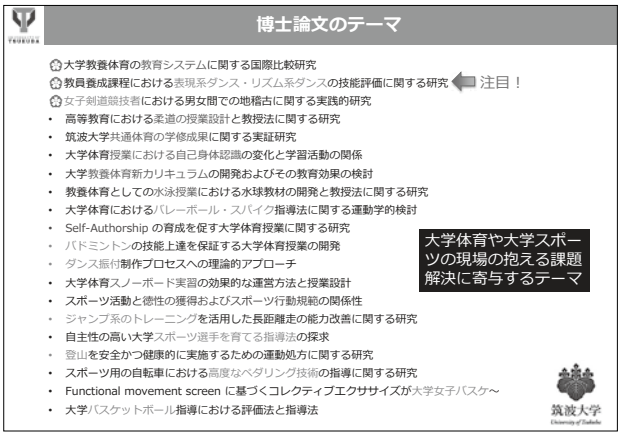

図 18

図 17

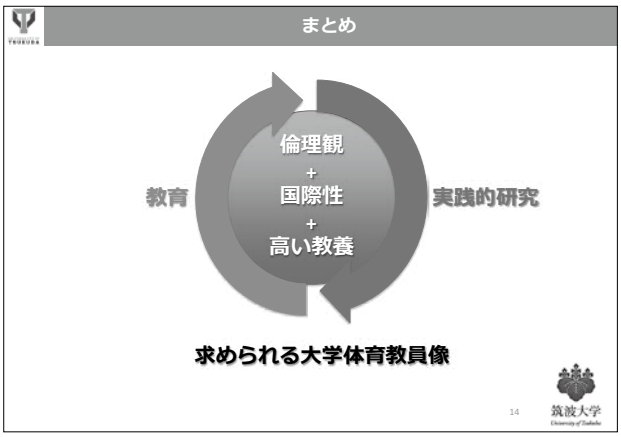

図 19

ます（図 16）。これもシラバスに 1 回から 10 回まであります（図 16）。これもシラバスに 1 回から 10 回まであります（図 16）。これもシラバスに 1 回から 10 回まであります

ういったことを目指して専攻で教育にあたっております。以上です。

村山：高木先生ありがとうございました。専攻の具体的なカリキュラムや実際に養成するうえでどのようなコンテンツが必要かというようなところを深くお話しいただきました。ご質問あれば先にお受けしたいと思います。後程議論を致しますが聞いておきたいことがございましたら。それでは、交代をさせていただきます。続きまして流通経済大学の田畑先生の方から全国大学体育連合の研修制度ということで、現在本部の総務部のお仕事もされて、関東支部の取りまとめをいただいている田畑先生にお話ししていただきます。

全国大学体育連合における研修制度
過去・現在・未来

田畑亨（流通経済大学、全国大学体育連合常務理事）：みなさんこんにちは。ただいま紹介に預かりました流通経済大学の田畑です。どうぞよろしくお願いします。

私の方からお話する内容は村山先生からもありました通り、全国大学体育連合（大体連）の、いわゆる研修会制度についての紹介と、今後の研修会制度のあり方についてご説明したいというふうに思っています。私が直接大体連で関わっている内容はいわゆる総務部というところに携わっておりまして、総務部の副部長という形で活動しています。私は何をしているかというと、主に大体連のお金をいじっているというところで、本来であればこの手の話については研修部長であったりとか、いらっしゃる村山先生から話をされた方がいいのかと思いますけれども、村山先生のご指名ですので話をさせていただきたいと思います。

まず多くの先生方がご承知の通りかと思いますけれども「大学体育連合の歩み」というかたちで話をさせていただきます（図 20）。大学体育連合の前身は 1952 年の大学体育協議会の設立総会というところから始まりました。社会状況や大学体育の役割等々の変化によって大学体育連合はその名称や組織を変え、現在の公益社団法人は 2012 年に取得し現在活動しています。2022 年には 70 週年を迎える組織です。では、この全国大学体育連合は定款によると（図 21）、学校教育法に定める大学をはじ

田畑亨氏

公社）全国大学体育連合について

- 1952年　大学体育協議会設立総会開催
- 1969年　全国大学保健体育協議会に名称変更
- 1973年　社団法人　全国大学体育連合設立
- 2012年　公益社団法人　全国大学体育連合へ移行

（大体連ホームページより）

図 20

公社）全国大学体育連合の目的

- 本法人は、学校教育法に定める大学をはじめとする高等教育機関における体育に関する調査研究を行い、その成果の普及活用を図るとともに、大学をはじめとする高等教育機関における体育に関する相互の連絡、協力体制を確立し、もって大学をはじめとする高等教育の発展に寄与することを目的とする。

（大体連　定款より）

図 21

公社）全国大学体育連合会員の状況

- 国立大学　40校
- 公立大学　14校
- 私立大学　201校
- 短期大学　26校
- 大学校　　1校
- 個人会員　109名　　合計　391校・名
- 賛助会員　　16社

（大体連HPより）

図 22

公社）全国大学体育連合におけるの研修会制度

- 全国研修会・・・各支部が主管を務め支部の関心と特徴を活かしながら、会員の研修ニーズと大学体育を取り巻く動向や社会の期待などにも十分に配慮し、大学体育教員としての教授力の向上をはかる。
- 指導者養成研修会・・・研修部が中心となり、高等教育機関で授業を行っている若手教員または、非常勤講師、大学院生を対象とした研修会
- 支部研修会・・・支部が主催する支部会員を対象とした研修会

図 23

めとする高等教育機関における体育に関する調査・研究を行うというところが主な目的というところで位置付いています。こういった研究を行うことで高等教育の発展に寄与するというところでやっています。大学体育連合の会員は、大学が主たる会員となっています（図 22）。国立大学が 40 校、公立大学が 14 校、私立大学は 201 校、短期大学 26 校、大学校が 1 校というかたちです。個人会員は 109 名、現在は 391 の学校と個人会員で構成されている組織になっています。また､賛助会員は 16 社です。

今回の話の主旨でございますけれども、要は大学体育連合の活動として大きな役割を担っているのが、こちらの研修会制度というところになってくるかと思います（図 23）。現在、大体連が開催している研修会は大きく分けて 3 つございます。1 つは全国研修会です。それと平成 20 年から開催している指導者養成研修会があります。また、各支部が実施している支部研修会と 3 種類にわかれます。これら全国研修会や指導者養成研修会の違いについて明確に規定している文章はありません。したがいまして 60 年誌が発行されてますが、これを基に、全国研修会と指導者養成研修会また支部研修会の位置付けを整理してみました。

まず、全国研修会については主幹が各支部となります。支部の関心や特徴を活かしながら会員の研修ニーズと大学体育の取り組み、動向や社会意義と期待などを十分に配慮して、大学体育教員としてのいわゆる教授法を向上させていくのが全国研修会の役割として整理できます。一方、指導者養成研修会については本部いわゆる研修部が中心となり、高等教育機関で授業を実施しているいわゆる若手教員また非常勤講師、そして大学院生を対象とした研修会と位置付けています。支部研修会については、各支部が主催する各支部の会員を対象とした研究会というかたちで、位置付いています。ですので、本日のテーマでもあるように、指導者、大学教員の育成の場として、大学体育連合はこれを大きく 3 つの研修会制度を実施して行っています。

それでは全国研修会で、どんな種目を対象にしてきてるか調べてみました（図 24）。

最も多く開催されているのが、ゴルフです。次いで、バドミントンでした。また、右側に記載されている種目については平成 15 年から令和元年までの研修会で実施された種目になります。

このように開催種目を見てみて、全国研修会で実施されている種目についてはスライド右側の方は特にそうですけれども、大学体育であまり実施されず、いわゆる大学教員が体験してみる、そういったようなスポーツがこの全国研修会で実施されているというところが窺えます。

全国研修会開催種目（平成15～令和元年）

・ゴルフ	9回	・太極拳	
・バトミントン	4回	・射撃	
・テニス	3回	・ヨットフィッシング	
・スノーボード	3回	・バレーボール	
・アルペンスキー	3回	・登山	
・ウォーキング	3回	・バスケットボール	
・卓球	2回	・能	
・スクーバダイビング	2回	・カヤック	
・乗馬（馬術）	2回	・ラフティング	
・トレーニング	2回	・フラッグフットボール　等	

（全国大学体育連合60周年誌・大体連H・P）

図 24

指導者養成研修会開催種目（平成20年～平成31年）

・ゴルフ	3回	・ダンス
・テニス	3回	・クライミング
・卓球	2回	・ソフトボール
・ラグビー	2回	・水泳
・ニュースポーツ	2回	・サッカー
・バレーボール	2回	・バスケットボール
・バトミントン	2回	・フットサル
		・ピラティス
		・フライングディスク
		・バスケットボール

（全国大学体育連合60周年詩・大体連H・P）

図 25

研修会のアンケート結果（過去２回分）

・参加者平均年齢

（全国研修会）

平成30年　37.5歳　　岡山（中四国支部）

令和元年　44.6歳　　佐渡（関東支部）

（指導者養成研修会）

平成30年　35.6歳

平成31年　37.3歳

図 26

研修会のアンケート結果（過去２回分）

参加動機

・（全国研修会）
担当授業の指導法向上の為
興味のある種目が開講された為
他大学の先生方との情報交換
開催地を訪問してみたかったから
上司の命令

・（指導者養成研修会）
担当授業の指導法向上の為
興味のある種目が開講された為
他大学の先生方との情報交換
他大学教員からの紹介

図 27

一方、指導者養成研修会の開催種目を見てみますと（図 25）、平成 20 年から平成 31 年までの間ですけれども、こちらもゴルフとテニスが 3 回開催されています。卓球、ラグビー、ニュースポーツ、バレーボール、バドミントンが 2 回開催されている状況にあります。

スライド右側の方につきましては、回数で 1 回の種目になっておりますけれどもこちらの種目につきましては先ほど示しましたようにいわゆる大学一般体育において、教授法を取得するためにより大学授業に即した種目で開催されている現状にあると言えます。

次は、実際に研修会に参加された方々から得たアンケート結果をお示ししたいと思います。

まず、参加者の平均年齢です。指導者養成研修会についてはいわゆる若手を中心とした研修会制度として位置付いているというところがありましたけれども全国研修会などの参加者の平均年齢なんかを見てみますと（図 26）、全国研修会、昨年は岡山で実施されましたけれども平均年齢としては 37.5 歳、今年関東支部が実施した全国研修会では 46.6 歳でした。指導者養成研修会についても、平成 30 年は 35.6 歳ということで、過去 2 回分のデータではありますが、平均年齢でみてみると、全国研修会、指導者養成研修会も比較的若手が参加しているように見うけられます。

次に研修会に参加する参加動機です。アンケート結果でも（図 27）、全国研修会、指導者養成研修会の開催目的は異なるものの、参加動機は共に同じな部分が見えてきました。全国研修会並びに指導者養成研修会では大学で担当する授業の指導法の向上のためであったり、興味のある種目が開講されていた、これも同じでした。また、他の大学の先生方との情報交換としての位置付けというのも同じでした。違ってくる部分に関しては、全国研修会ですので、いろんな土地で実施する関係上、その土地に訪問してみたかったから、であったりとか、いわゆる上司からの命令というかたちで参加したというところが全国研修会と指導者養成会の違いでした。指導者養成研修会については他大学の教員からの紹介というかたちで、指導力の向上という面、研修会の役割として指導力向上の役割という面もありますけれども、いろんな先生方と交流を持てるというところにおいても、研修会の役割というのが見出せるのかという風に思っております。次に研修会の充実度についてです（図 28）。5 点評価になっております。参加された方々からのアンケートを見ますと、各種目の満足度はこの結果から見て、非常に高いのかなというようなところが窺えます。そういったことで、実際に研修会を実施してそこで参加をされている先生方からは、この研修会で非常に高い満足度を持っていると

研修会のアンケート結果（過去２回分）

研修充実度

- （全国研修会）

2018年　フライングディスク：4.8
フィットネス：4.0
ゴルフ：3.8

2019年　バウンドテニス：4.0
スクーバダイビング：4.4
ゴルフ：5.0

- （指導者養成研修会）

2018年　ゴルフ：5.0
卓球：4.8
ピラティス：4.5
フットサル：5.0

2019年　フライングディスク：4.7
バスケットボール：4.9
バトミントン：4.8
テニス：5.0
ゴルフ：4.9

図 28

大学体育教員の現状

- 人事基準において研究業績重視の傾向にある。
- 専門分野科目と一般教育の体育実技を担当する場合が多くなってきた。←実技指導に苦慮している。

（全国大学体育連合60周年誌より）

- 研究費の不足・減少

（『大学教員と研究費』広島大学高等教育研究開発センター）

- 教員の業務増

図 29

いうところです。毎年良い研修会を実施しておりますが、年々参加者が減少傾向にあります。今年関東支部で開催しました全国研修会においても、16 名の参加というかたちです。で、昨年の岡山というところにおいても 20 名程度にというところになっている現状から見ると、大体連として考えなくてはならないのは、いかにしてこの全国研修会というものをしっかりと盛り上げていかないといけないのかというところです。一方、指導者養成研修会については、先ほど村山先生もおっしゃっていましたけれども、関東支部が一番会員校が今多い状況ではありますけれども、そういった関東地区でその研修会を実施するということに関係していて、その参加者は非常に多いというところになっています。そういったところで、ちょっと大体連として今全国研修会や指導者養成研修会のいわゆる研修会としての棲み分けというところが、必要になってくるのではないかというところになってきます。

今日の大学体育教員の養成と、またこの研修会制度のあり方について、議論する中で、一つ大学体育教員の現状について、整理してみました（図 29）。こちら上 2 つの意見については、これは全国大学体育連合 60 周年誌から引っ張ってきたものですけれども、大学体育教員の現状としては、まず研究業績重視の傾向が非常にあるという形になっている。専門分野科目と一般体育教育、実技担当科目を担当する場合が非常に多くなってきているので、先生方は自分の研究領域はある一方で実技を指導しなければいけない状況にあります。

次に、研究費不足などの現状、こちらについては、広島大学の紀要から持ってきた大学教育と研究費というところで書かれている内容です。なぜこういった話を持ってきたかと言いますと、全国大学体育連合の研修会制度にはやはり参加費というものが関わってきます。今回佐渡島で研修会を行いましたけれども、参加費が 10 万円かかるんですね。ですので、この 10 万円捻出するためにはこの研究費というものが必要となります。またこれに移動費もかかってくるという関係もあるので、研究費と参加状況が非常に大きく影響してくるのではないかという風に考えています。それと、ここは私個人の意見でもあったりもするんですけれども、大学教員における業務がすごく増えているのではないかというところになります。また一方では多くの先生方っていうのはスポーツに関われているわけで、様々な協会の仕事があったりとか、私もそうですけれども大体連に携わっている。また、運動部もみなければいけないというようなところで、研究といわゆる教育力であったりとか仕事のバランスといったところで、やはり現代の大学体育の先生方っていうのは非常に業務が増えているというところになっている。そういった状況の中で、我々全国体育連合は研修会を実施していますので、見ている通り参加者が少ないというのはそういったところからも影響しているのではないかと考えます。そういったところと、どう研修会に参加していくかというところが 1 つポイントになってくるかと思います。

ここから関東支部がどういったコンセプトで研修会を実施しているかについて簡単に説明させていただきます（図 30）。で、関東支部は最も会員校が多いところなんですけれども、やはりなかなか各支部の参加者が少ないという状況にあるというところでなんとか活性化していきたいというところがあるんですけれども、コンセプトとしては、これまで実技の授業の見直しおよび発展に寄与するということと、体育教員の英知を結集して体育教育を見直していくというところが 1 つコンセプトに置いています。そのコンセプトに基づいて、学内で実施可能な種目のスキルアップを行っていく。それと学内では実

関東支部の研修に関するコンセプト

これまでの実技授業の見直しおよび発展に寄与すること
体育教員の英知を結集して、体育教育を見直す

学内で実施可能な種目（既存種目）におけるさらなる展開
　⇒新たな情報、指導法の習得、指導者のスキルアップ
・卓球（令和元年）

学内で実施できない種目⇒どのように大学体育に取り入れることができるか？
・ダイビング（令和元年度）
・ボウリング（平成30年度）
・野外活動（平成29年度）
スキー、スケート、スノーボード、その他の種目はどうか？（まだ実施していないが）

あまり実施されていない種目の導入
・バウンドテニス（平成30年度、令和元年度）

図 30

実技

野外活動（コミュニケーション）2017（平成29）年8月26日（土）～27日（日）
会場：ラポランド黒姫
講師：松本大学　犬飼己紀子先生

バウンドテニス　2017年11月18日（土）
会場：国士舘大学
講師：日本バウンドテニス協会　田中徹先生

ボウリング　2018(平成30)年9月3日（月）
会場：流通経済大学新松戸キャンパス、ラウンドワン新三郷店
講師：獨協大学　和田智先生

図 31

施できないけれども大学体育として取り入れることは可能ではないかというところで種目の選定を行っているというところ。3 つ目は大学体育の授業であまり実施していない種目の導入を図りながら、検討していく。こういったコンセプトのところで、活動しているというところになります。これは過去 2 年、3 年の活動内容というかたちで、このかたちで、関東支部は研修会を実施してきました。

今日のテーマとしては「研修会制度のこれから」というところについてもお願いがありましたので、今回調べるところでより発展できる研修会をどうするべきかというところでまとめていきたいと思います（図 32）。アンケート結果からもあるように、また開催種目というところについて、そのニーズに合わせたところでマッチングというのが非常に大事になってくるのではないかというところになります。先ほど言いましたように、その大学体育で扱う種目が非常に多いというのが 1 つ現状である中で、そこで求められるニーズとは一体なんなのかというところを、研修部を中心に、考えていくっていうところなんですけれども、この開催種目のマッチングっていうのが非常に大事ではないか、まぁそういったところで研修会制度を盛り上げていくっていうことです。それと、今実際に検討中というところでもありますけれども、先

研修会制度のこれから（未来）

- 開催種目のマッチング
- 全国研修会と指導者養成研修会の隔年開講（検討中）
- 研修会時期の検討
- 大学体育研修精励賞、研修精励特別賞の認知拡大

図 32

ほども申しましたように全国研修会と指導者養成研修会では、その参加者の人数は、非常に少ない、減少しているという現状にあります。ですので、来年はオリンピックがある関係で、全国研修会は開催しませんけれども、2021 年以降は北海道で実施する予定ですが、この指導者養成研修会と全国研修会の隔年開講というかたちで、より参加者を増やしていくっていうところでいます。これは先ほども言いましたように研究費というところにもなってくるので、研究費をいかにこの研修会に使っていけるかというところでこの隔年開講が必要ではないかというところになります。それと研修会の開催時期についても、大事になってくるのかと思います。今年の事例で言いますと、関東支部の研修会はこちらの体育学会の前の週に開催したという関係もありますので、学会であったりとか研修会であったりとか夏休みの時期であるとやはり先生方は非常にご多忙な時期でもあります。また、3 月に指導者養成研修会実施していますけれども、こちらは大学によっては入試の時期であったりとかっていうことで、大学教員の先ほども現状を申しましたけれどもやはり、1 年を通してやっぱり先生方は忙しい状況の中で、いかに活性化する時期というものが非常に大事ではないかという風に考えています。先ほどもお話があったかと思いますけれども、大体連そのものの組織というものをまだ知らない先生方がいらっしゃるという現状の中で、この研修会に多く参加することによって、精励賞っていうものを大体連が賞を与えているわけですけれども、この大体連の組織同様に、こういった表彰制度があるということをより大きく認知していくことで、この研修会というものが活性化していくのではないかというところになっています。

まとまりのないところで、話をしてきましたけれども、現在大体連が抱えている研修会制度の話題について発表

させていただきました。ありがとうございます。

村山：田畑先生ありがとうございました。いかがでしょう。何かご質問があれば。

山中裕太（筑波大学）：筑波大学からきました、高木先生のもとで勉強させていただいてます山中と申します。研修会ってことで話があったんですけれども、大体連がその研修会を開催するにあたって研究費であったりとか、色々お金がかかったりっていう部分があると思うんですが、例えば本にして出版してみんなに広めるとか、動画を大体連のホームページからアップをして全国の人たちが見れるようにしたら、その場所もそのお金も要らず、そういうかたちで高等教育の発展に繋がるのかなって思ったんですけれども、その研修会っていうかたちにするのはなんでなのかな、っていうのをちょっと疑問に思いまして。

田畑：研修会を実際に実施するということでしょうか。それは、実技を伴うからだと思います。実際に身体を動かしてみて、その中でその授業プログラムを検討していくっていうところになるので、実技は大事というところで研修会は実施していますけれども、これからを考えるときにはやはり映像だったりとか、そういったコンテンツを積み重ねるっていうことも、もしかしたら大体連の使命ではあるかと思います。

山中：ありがとうございます。

大学体育教員へのキャリアアップに関する若手研究者の意識

村山：続きまして、シンポジストとして最後の、順天堂大学の鈴木先生。こちらは体育学会の若手研究者委員会の委員長として「若手の会」という会が発足しておりますが、こちらにいわゆる大学体育教員ってものに対する意識調査をお願いしているというかたちで、実際にこれからを担っていく研究者の皆さんがこの問題をどのように捉えているかというところを知りたいというところで、お願いをした次第です。鈴木先生お願いします。

鈴木（順天堂大学）：順天堂大学からまいりました鈴木と申します。本日はどうぞ宜しくお願い致します。このような場でお話をする機会を頂きまして、村山先生をはじめ、関連の先生方に御礼を申し上げます。

本日は、立場上、先ほど村山先生からお話がありました通り、現在の日本体育学会の若手研究者委員会の委員長を務めさせていただいている関係で、体育学会のシンポジウムの際に、「若手の会」という会が任意の団体がありまして、そこのメーリングリストの会員にメールを配信しまして、アンケートを取らせていただきました。その結果をもとに、今の日本体育学会の会員に限られますけれども、若手研究者がどのような思いを抱えているのか、思いがあるのかということをご紹介させていただきたいと思います。

本日はまず、冒頭、体育学会における若手研究者委員

鈴木宏哉氏

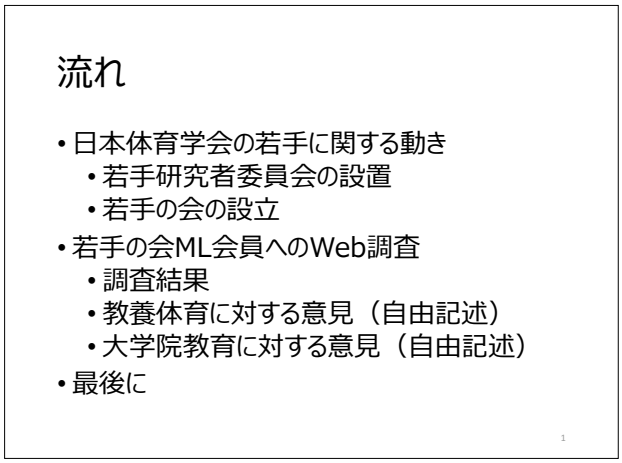

図 33

図 35

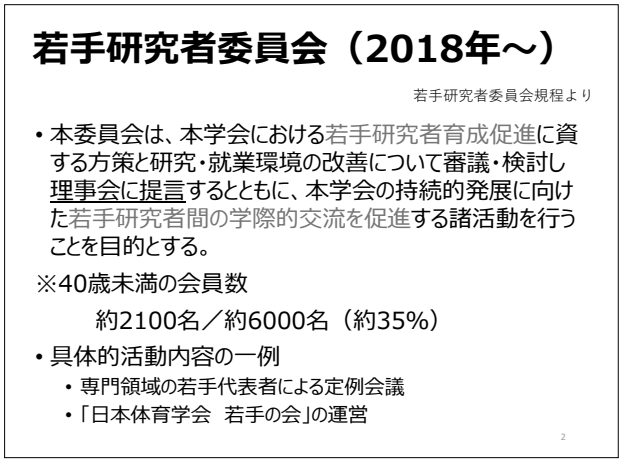

図 34

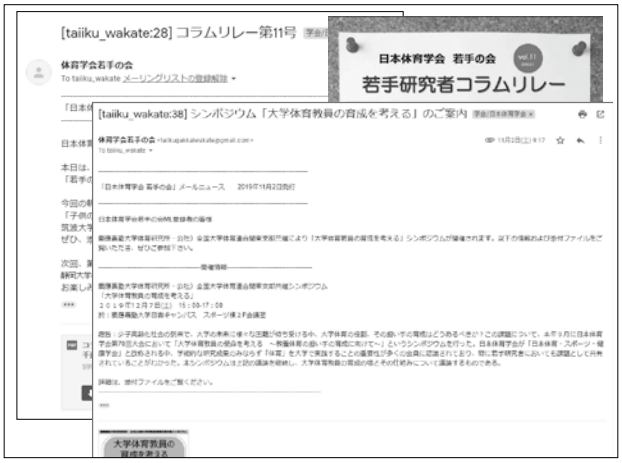

図 36

会あるいは若手の会の話をさせていただいて、そのあと後半、調査結果の量的なデータとその量的データの深掘りという意味で自由記述の回答を教養体育に対する考え方とか、今の大学院教育あるいは大学院を卒業された方が多いんですけども、自分が大学院時代どうだったかといった意見をいただいておりますので、ご紹介したいと思います（図 33）。今日は、私、若手研究者委員会の委員長でございますけれども、副委員長の一階先生もいらしておりまして、情報にミスがあればフォローしていただきたいと思いますけれども、若手研究者育成促進に資する方策と研究等、様々な若手に関わる問題を体育学会の理事会の方に提言するということと、それと研究者間の交流を促すということを目的にしております（図 34）。現在、若手の定義は様々ですけど、ざっと 40 歳未満という風にしてみますと、体育学会員はおよそ 35％が若手ということで、未来を担う、体育学を担うこの 35％の人たちがどんなことを考えて、どのように環境を改善して、体育学を発展させていくかということを、若手が考えるということの場が必要だろうということで、2018 年に常設委員会として動き出しました。それまで、2014 年ごろからその将来構想の中での若手の議論する場っていうのがあったんですけど、2018 年に正式に若手の委員、15 の専門領域があるんですが、その 15 の領域の全てから 1 名ずつ若手の会員を出していただいて、定期的に会合を開いているところでございます。過去には村山先生にもオブザーバーとして、参加していただいて、こういうような議論をしたいっていうので意見交換をさせていただいたこともございました。その一環として、日本体育学会若手の会というものを設立しまして、その中で若手の意見交換あるいは体育学会への提言とかいうようなことを議論しているところでございます。

具体的には若手の会というのは原資と言いますか、お金のある会ではありませんので、今のところはメーリングリストで情報の交流をしているということで体育学会のトップページから登録をすることができる状況になります（図 35）。実際には若手の会の主な情報交流として

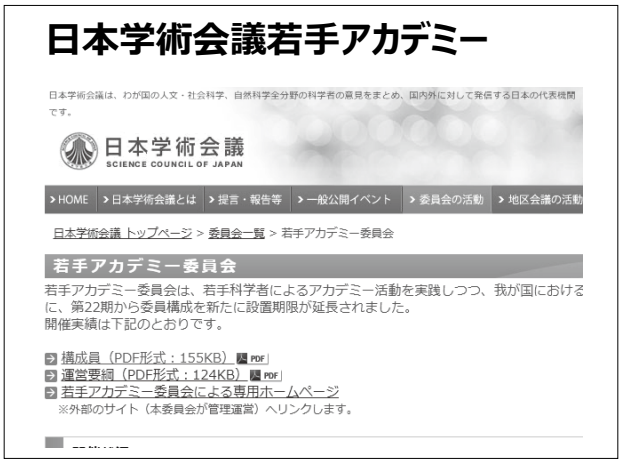

図 37

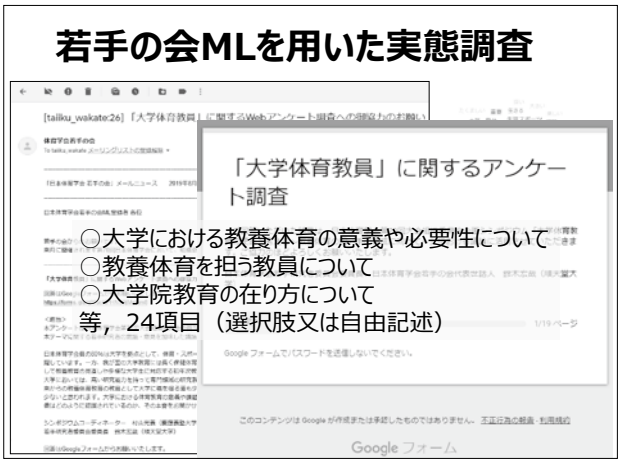

図 39

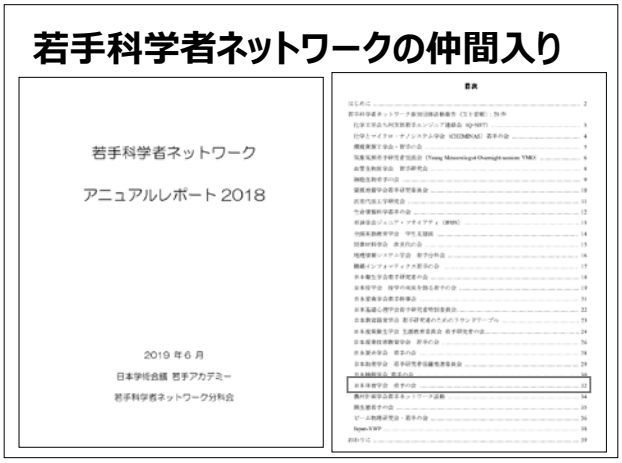

図 38

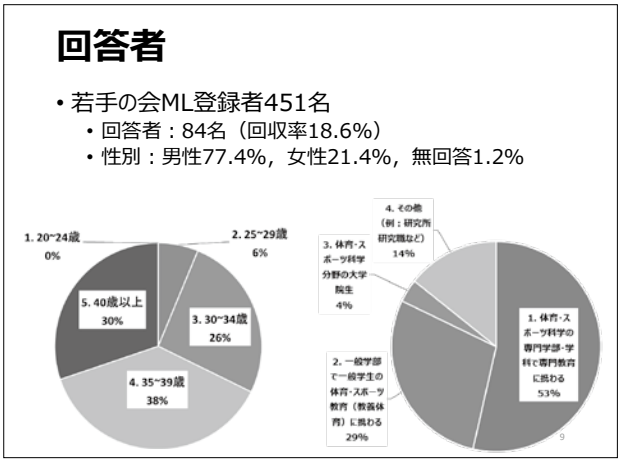

図 40

はコラムリレーをやっていて、「私こんな研究をしております」というようなことやこういう交流ができたらいいなというようなことをメーリングリスト会員に配信して、ある種のマッチングと言いますか、「そういう興味があるんだったら一緒に研究できるのではないかな」とかっていうような交流をしています（図 36）。他学会のシンポジウム等も、配信しておりまして、11 月にはこの会の内容も配信したところでございます。ですので、体育学会の若手に配信したい場合には、ぜひこの若手の会のメーリングリストにお問い合わせいただけたらと思います。

ご承知の方も多いかと思いますけれども、数年前に日本学術会議の中でも若手アカデミーという組織ができました（図 37）。その中、そういった流れにのっかりまして、ほぼ同時期に体育学会の中でも、若手の問題を議論していこうという動きがあって、遅ればせながら若手アカデミー設立から 5 年ほど経ちましたが、日本体育学会にも若手の会ができまして、現在若手科学者ネットワークっていうのが日本学術会議の中にありまして、その中のようやく構成員と言いますか、名実ともにメンバーになったということになります（図 38）。

さて、今日の本題になりますけれども、その若手の会員に調査を行った結果をご紹介したいと思います。調査自体は今年の 8 月に行いました（図 39）。メーリングリストの中でグーグルフォームを使って、ウェブアンケートを行いました。おおよそですけれども、教養体育の意義とか必要性、教養体育を担う教員についてとか大学院教育のあり方についてなど選択式又は自由記述で聞いております。実際に登録者は今、9 月時点で 451 名ですけども、もう少し増えて　500 人弱というふうにご理解いただければと思います（図 40）。その中で、2 割弱の方にご回答をいただいております。回答した方々の大半は 30 代ということで、大学院生というよりかはもうすでに、働き始めている人が半数以上というか 8 割がた働いている方々。そして教養教育を担う人、体育・スポーツの学部で仕事をしている方が大半でございます。こちらは、

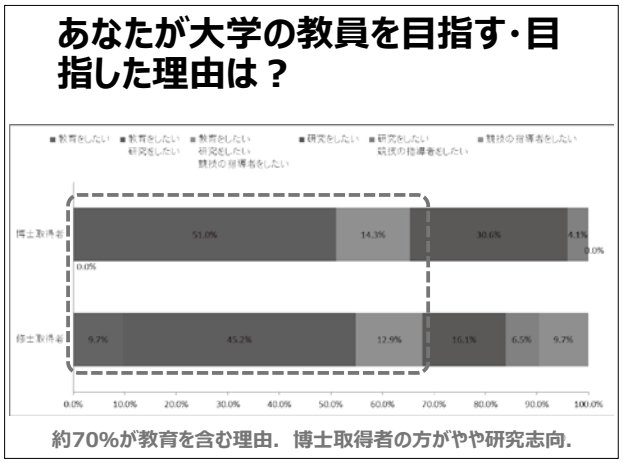

図 41

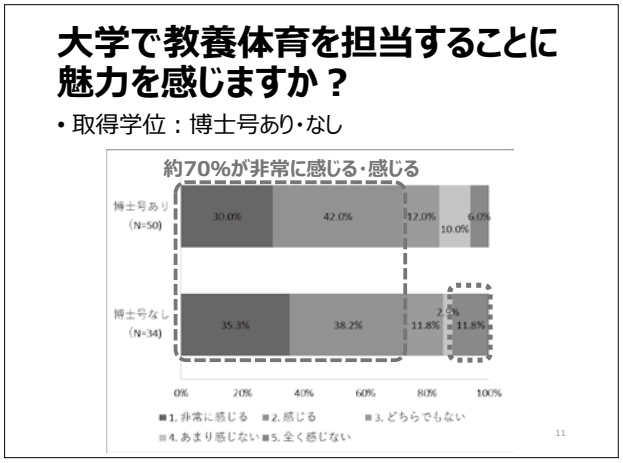

図 42

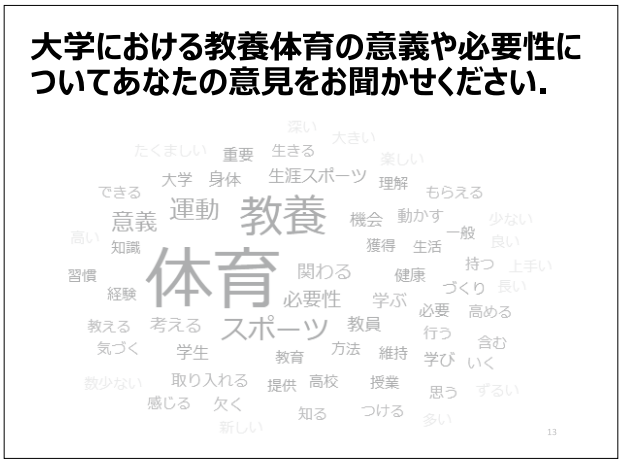

図 43

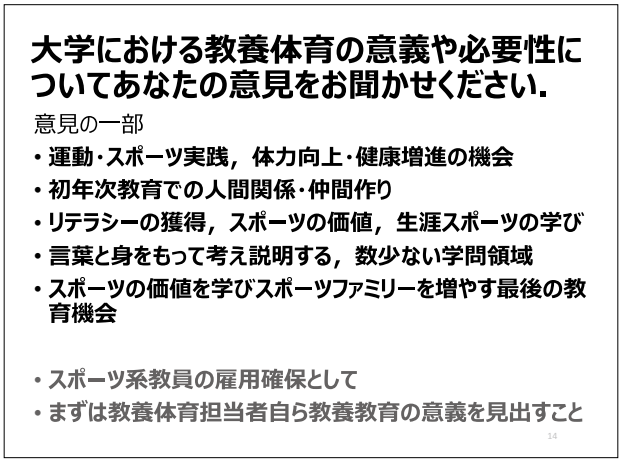

図 44

まず大学の教員を目指すあるいは目指した理由は何かというふうに聞いた結果でございます（図 41）。ちょっと回答がわかりにくいかもしれませんが、大きく言いますと、「教育をしたいから大学の教員を目指す、目指したんだ。」「研究をしたいからだ。」「競技の指導をしたいからだ」というふうに分類をして、マルチアンサーなので、「教育をしたいし研究もしたい」「教育もしたいし研究もしたいし競技の指導もしたい」こういうような組み合わせでみましたところ、おおよそですけれども、現在博士号を取得している方と、修士号を取得している方というので分けても大きな違いはなくて、約 7 割の方々は教育を含む理由、教育に携わりたいということが大学の教員を目指す理由としてあげられています。研究については、研究だけをしたいというわけではないのかもしれませんが、教育とか競技の指導にチェックを入れてない人たちは 3 割。ただし、大半は教育と研究の両方をしたいという状況でございます。教養体育を担当することに魅力を感じるかということについては、やっぱり博士号を取得した人は教養体育というよりはやっぱ研究というような意識があるんじゃないかと思っていましたけれども、実際はそういった違いがあるわけではなくて、非常に感じるという風に 7 割方回答していると（図 42）。ただ、一方で一部に全く感じないという強く主張している方もいるということで、この人たちの深堀が必要かなと具体的に聞いてみました。テキストマイニングのような形でやりますと、頻出ワードが大きく表現されますけども、意義とか必要性、生涯スポーツとか教養とか、考えるとかそういったワードが出てくるんですけれども（図 43）。具体的な質問でみますと（図 44）、運動スポーツ実践、体力向上、健康増進の機会。そして初年次教育での人間関係、仲間づくりにとてもいいんだと。ある種これは教養体育のシラバスとしては目指すものではないんですけれども、現在の大学の姿を反映しているところなのかなと思います。体育・スポーツがそういう仲間づくりにもつながっている、そしてリテラシーの獲得、スポーツの価値、生涯スポーツの学びとして、重要であると

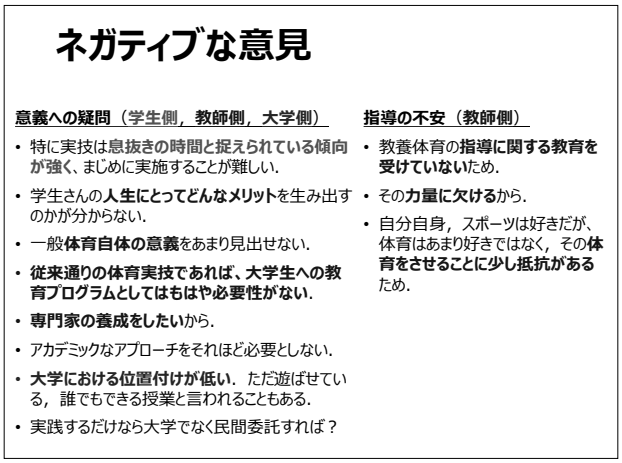

図 45

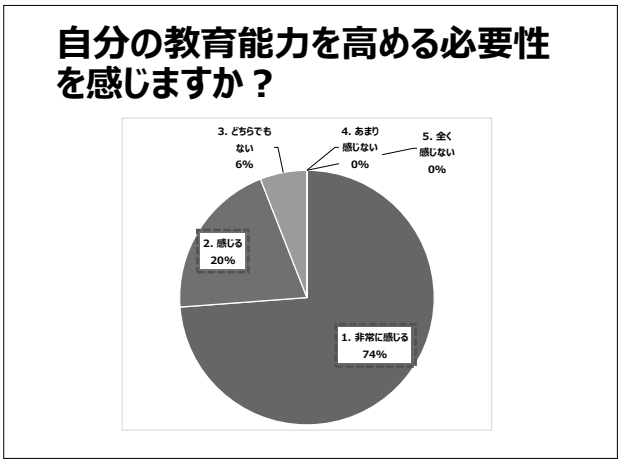

図 46

いう、リテラシー、身体リテラシーあるいは健康リテラシー、まぁそういったところを学ぶ機会になるだろうと。そして言葉と身をもって考え説明する数少ない学問領域であるという、特異な科目であるから、必要だということ。あとはスポーツの価値を学び、スポーツファミリーを増やし､最後の教育機会であると。やはり体育､スポーツの価値を高めていく、そういうことに関する学びができる最後のチャンスだということです。一般の方々にスポーツとは何か？　というのを考えてもらう最後の機会になる。また、少し趣旨は違うのですけれども、やはり大学院生と若手の研究者としては、教員の雇用確保としては教養体育というのがないと、科目が減ったら公募も減ってしまう切実な思い、それと教養体育担当者は自ら教養体育の意義を見出すこと、という意見もございました。まぁ裏を返せば、実践している先生方自身も十分にはその意義というのを説明できていないのかもしれないと思うんです。思い切ってネガティブな意見もご紹介させていただきたいと思いますが（図 45)、まずは先ほど少し出ましたけれども、意義について学生側の視点で言いますと、特に実技は息抜きの時間と捉えている傾向が強く、真面目に実施することが難しいという意見。学生の人生にとってどんなメリットを生み出すのかわからないという教師側の目線。一般体育自体の意義をあまり見出せないと感じている回答者もおりました。従来通りの体育実技であれば、大学生への教育プログラムとしてはもはや必要性がないのではないかという厳しいご指摘もあります。専門家を養成したいという意味で、教養教育を担当するということに対する魅力というよりかは、専門家を養成するという仕事に携われる。アカデミックなアプローチをそれほど必要としないと感じている先生もいらっしゃいます。大学における位置付けが低い、まぁ先ほどの前の回答と関連するかもしれませんけど、ただ遊ばせている、誰でもできる授業と言われることもあると回答された方は実体験としてあったということで、そういう中で、実践するだけなら大学でなくて民間委託すればいいんじゃないかっていう発想にいってしまうんじゃないかなと、そのように回答されている方もいらっしゃいました。一方で､ネガティブな意見なんですけれども、意義は否定しないけれども、やはり指導に関する教育を受けていないから不安があると。あとは、力量にかける、これも不安があると。意義は否定しないのかもしれないですけど、スポーツは好きだけど体育はあまり好きではなく、その体育をさせることに少し抵抗がある。この回答者はスポーツと体育ということを少し切り離して、ちょっと違うものという風に考えて回答されているものでした。

そういった背景にありますけれども、自分の教育能力を高める必要性を感じますか？　という質問をすれば、もれなく、感じるという、まぁ不安を感じている人たちも多いわけなので、やはり教育力を高めたいと思ってはいるということなんですが（図 46)。じゃあ実際にその機会があるか、先ほど研修制度のご紹介もありましたけれども、この 3 つから選んでもらいました（図 47)。実技に関して教育能力向上の機会がある、講義に関して教育能力向上の機会がある、FD 研修を受けている。この 3 つで複数回答をしております。FD 研修を受けているっていうのは、大半の先生方の回答で、次に講義に関しての研修機会があるっていうのが 6 割で、まさに大体連が研修などでやっている実技に関するものは最も低い、まぁそれでも 50％はある、機会はあるというふう

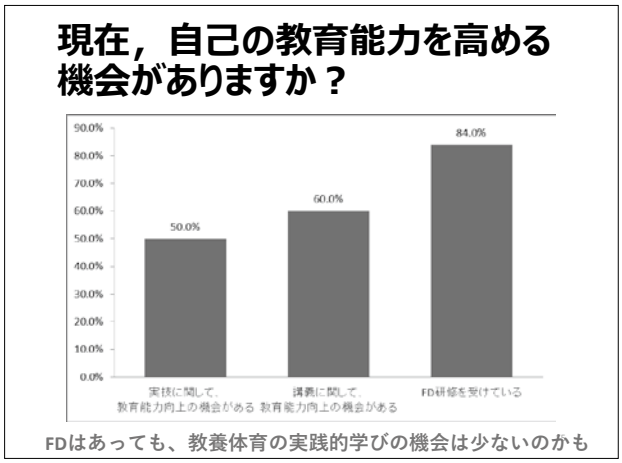

図 47

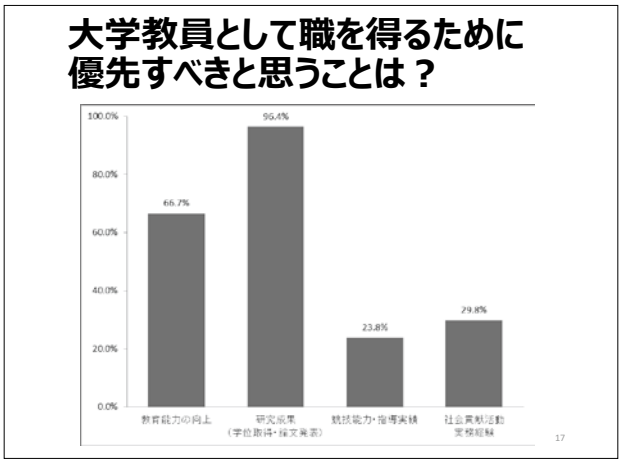

図 49

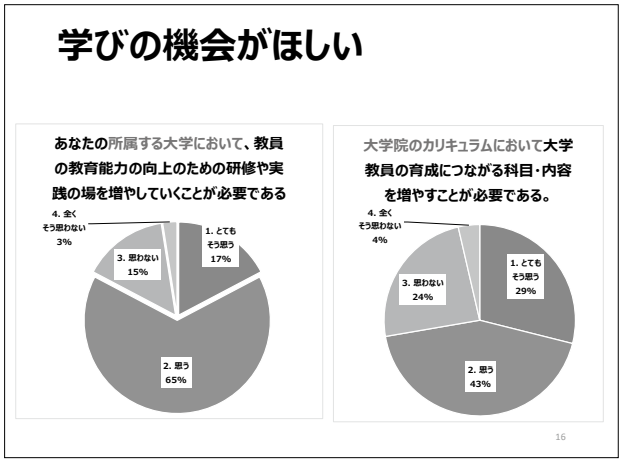

図 48

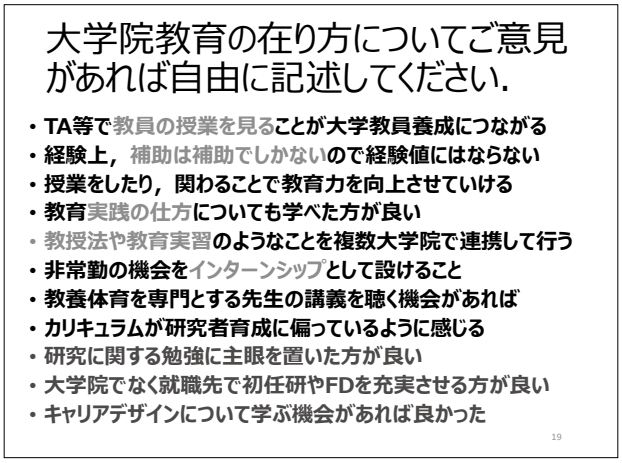

図 50

に回答して、まぁ参加しているかどうかは別なんですけど、まぁ機会はあると。ただ FD、もちろんどこの大学でもやられていると思うんですけども、実際の中身として教養体育の実践的な、まさに筑波大学で大学院の中でやっているような実践的な学びの機会というのはやはり少ないのかもしれないですし、学部・大学での全体での FD では、一般的な講義全般に関わることということで、なかなか実技に関しては実践的な機会っていうのはなかなかないんだろうと思います。

学びの機会が欲しいということではあるんですが（図 48）、そういうふうに思っている人たちが、大半であるということで、やはりそういうことを求めているんですけれども、カリキュラムで科目内容を増やす必要があるかというと、それよりかは少し減ってくる。まぁですけれども、7 割方増やす必要がある。思わないという回答は、大学院のカリキュラムでっていうと、必要だとは思ってるんですけどもカリキュラムで用意する必要があるかっていうとちょっと疑問を感じる人は少し増える。その背景にあるのは、やはり大学の教員を目指す上で、先ほどもデータで示しましたけども、実際に教員を目指している人、なった人が、職を得るために優先すべきことは何かっていうのを、これも複数回答ですけど、教育なのか研究なのか、競技能力指導実績なのか、社会貢献とか実務経験なのかっていうと、やはり一番多く反応があるのは、学位取得とか論文を発表することを優先すると、その後に教育のとなっているので、どうしてもこの研究成果を出すというところに重きがあると、なかなか学ぶ機会が欲しいと思っても、ジレンマを抱えているのかなと思います（図 49）。

具体的に大学院教育のあり方について質問を投げかけますと、具体的な例で紹介しますが（図 50）、例えばポジティブなご意見です。TA 等で教員の授業を見ることは大学教員養成につながる、良い勉強になると回答している方や、全く反対ですけど経験上、補助は補助でしかないから経験値にはならないということで、TA をどのように経験するかっていうことが、ただ出席カードを配

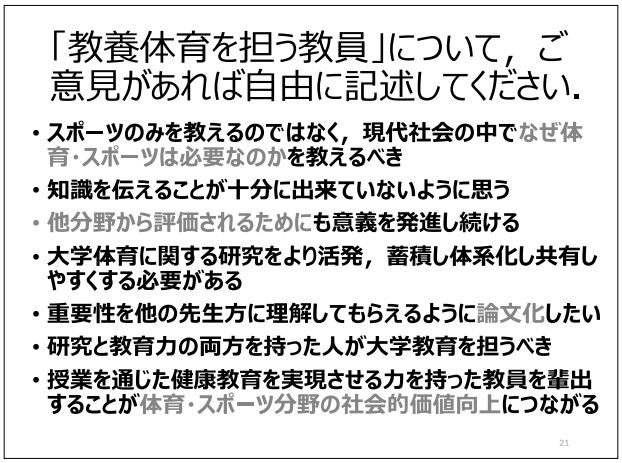

図 51

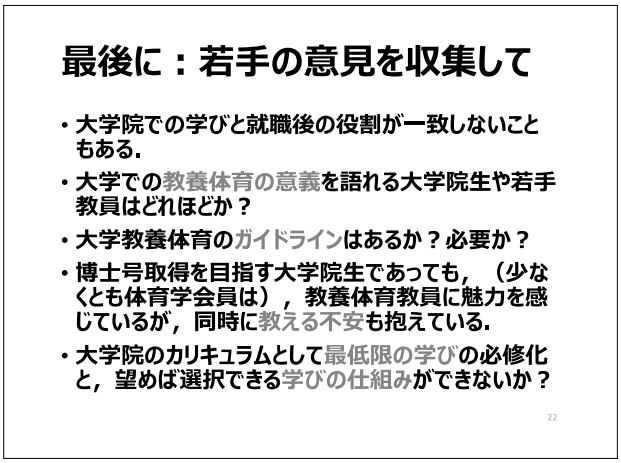

図 52

ってるだけというのはほとんど経験にならないのかなと。でも授業を実際に行い、関わることによって教員の教育力を向上させていけると感じている方もいらっしゃいます。また、教育実習の仕方についてもやはり学べた方がいいと、大学院の中でカリキュラムと言いましょうか、そういう機会が欲しい。教授法や教育実習のようなことを複数大学院で、1 つの小さな大学院ではできないかもしれないけれども連携してやればいいと。時間が迫っているようですので、少し急ぎます。非常勤の機会をインターンシップとして設けるっていうのはどうなんだろうかという提案をされている方、教養体育を専門とする先生の講義を聞く機会があったらいいのになと思っている、まぁこれは既に就職された方の意見です。カリキュラムが研究者育成に偏っているように感じるというご意見。一方で、全く反対で研究に関する勉強に主眼を置いたほうがいいと言っている方もいます。大学院で学ぶんじゃなくて、やはり FD のような就職先で初任研や FD を重視させるほうがいいと。まぁこれ小中高の教員のようなかたちのイメージだと思います。いずれにしましてもキャリアデザインについて学ぶ機会があればよかったのにというように、どういう道に進むにしても大学の教員以外でも色んなキャリアデザインのことを知る、学べばよかったなと。

いうことでちょっと駆け足にはなりますが、教養体育を担う教員について自由に書いていただくと（図 51）、スポーツのみを教えるのではなくて、現代社会の中で、なぜ体育・スポーツは必要なのかを教えるべきだ、と言っていたり、知識を伝えることが十分にできていないのに、他分野から評価されるためにも意義を発信し続ける、体育スポーツの中の先生方だけでなくて他分野の先生方に評価してもらうということが教養体育の生き残りに必要ではないか。同じように、研究を活発にし、蓄積し共有しやすくする必要があると、整理していく必要があると。そして重要性を他の先生方に理解していただくために論文化したりという希望を持っている先生。研究と教育力両方持った人が大学教員になるべき、今日の議論のお二人の先生方のご指摘と同じ。それと体育スポーツ分野の社会的価値の向上につなげるためにはやはり質の高い教員を輩出していく必要があるということ。

そういったことを踏まえて時間がないところで最後失礼いたしますが、いろんな資料、実はそれだけではなくてたくさんのアンケートに回答をいただいたものをザーッと読みますと（図 52）、大学院での学びと就職後の役割が一致しないこともあるので、やはり大学の教員にならない大学院生もいるわけなので、それを目指してない大学院生もいるので、必ずしもそれに特化したカリキュラムである必要もないということ。あとは大学での教養体育の意義を語れる大学院生や若手教員が増えないといけないのかなと。もしかすると、私自身も何年か教養体育の担当をさせていただいて、他大学でさせていただいておりましたけれども、見よう見まねでシラバスを書いていたわけですが、実際こういうシラバスでいいのだろうかどうかってそういう見本となるようなもの、ガイドラインがあったらいいのかなというような、まぁそれが必要なのかどうか。そして博士号の取得を目指す大学院生であっても少なくとも体育学会の会員の声では教養体育教員に魅力を感じてはいます。でも同時に教える不安も抱えているので、そういうところからやはり大学院のカリキュラムとして最低限の学びを必修化したりとか、あるいは望めば選択できる学びの仕組みがあると良いの

かなというふうなことを考えました。このあと、先生方からのご意見をいただきながら残りの意見をお伝えできればと思います。少し時間を超過してしまいました。申し訳ございません。以上となります。ありがとうございました。

村山：ありがとうございました。はい。ご質問ございますか？　時間もおしてまいりましたので、先に進みます。鈴木先生ありがとうございました。

指定討論

村山：それでは若手の具体的な意見を細かく聞いたところで、お三方に対して指定発言を頂くということで広島大学・東北大学名誉教授の羽田先生をお招きしました。羽田先生には大学全ての教育システム、教育の在り方の研究がご専門ですので体育学会に引きつづき一緒にお考えいただいているのですが、一歩進めるうえでシンポジストにコメントを頂いていることと羽田先生の方からもこの問題にご意見を頂くということでお願いをしたいと思います。

羽田（広島大学・東北大学名誉教授）：こんにちは。私は小中高と運動音痴でございまして、運動会がある日は台風が来てつぶれないかと祈り続けておりましたが、体育の先生方と一緒にシンポジウムに参加できて大変嬉しく思います。今話された悩みは、日本中あらゆる分野の大学の悩みであります。物理学、英語教育などでも、大学教員は、大学で教育をする方法をほとんど学ばずに教育をやってきている。大学院の目的自体にそれが入っていないですよね。それでいろいろな苦労があって、アメリカでは PFFP（Preparing Future Faculty Program）大学教員準備プログラムというのが、大学の自主努力で作られていり、カナダでもアメリカでもオーストラリアでもあり、ドイツでは、ハビリタチオンという大学教授資格が制度化されています。

日本が一番大学においては遅れているというか、自然

羽田貴史氏

発生的に取り組まれている。私が所属していた東北大学も含めて今、8つの大学がこのプログラムを作っています。それから入ってきた新任の先生がどれだけ早く成長するかが重要です。私が何回も大学教員調査してわかったことは、大学教員が一人前感を持つのは就職してから8年間、38歳になったら8割の人が自分は立派な大学教員だと思い込んでしまう。だから後は何もしないから、38歳まで頑張って鍛えましょう、と言ったら大体経験的に皆さん一致している。僕自身も気が付いたら、それくらいのときに一人前になっている気がした。入ってきた新任教員を大学が現職教員として大学がどうプログラムで成長させるかが大事ですね。

院生時代の大学院教育だけにすべてを放り込んでも、無理なので、大学院への入り方もそのような風にはなってないです。だから大学の養成と現場と両方が手を組んでどうするかが大事です。

教育関係共同利用拠点という文部科学省の制度がございまして、東北大学もすでに10年ほどこれを受けて、大学教員に必要なプログラムを現職大学教員、大学院生問わず広く公開をしております。それが今の流れです。大学体育においてもそのようなものを作った方がいいですよね。ただ大学体育の難しさは、今年になってからいろいろとお聞きしていて難しいのは教養部が解体し、一般教育の必修でなくなった後のことです。考えてみると、一般教育がなくなった、それでは物理学はどうするかといっても、医学部に行っていれば、物理学がないと学部の学習ができないから、否が応でも教えます。語学もそうです。文学部に限らず英語を使うから、どうしても1年次2年次に英語教育をする。ところが体育だけは、専門課程に行ったときに、それを使う場面がない唯一の科目です。これは、大学体育を教養教育の中で位置付けるうえでは、非常に困難がある科目である理由だと思います。

ところで、私は東北大学でもずっと授業評価のまとめ役の委員長をやっておりましたが、一番満足度の高いのは体育です。気分転換を図るという意味も大きいですね。したがって東北大学の中では、大学体育を変えなくてはいけないという危機感がないのです。適当にやっても満足度4.0近いスコアになる。研究大学だからかもしれませんが、大学体育の在り方が今ある実技科目で気分転換を図るということだけで、大学の中で今後も存続できるかという問題が担当者の中でも共有されていない。これ

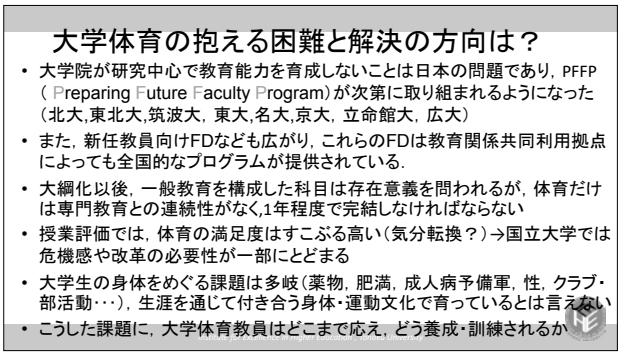

図53

は最後の鈴木先生のお話の中にもございましたが、実際に大学生を見ると、スポーツ科目や運動科目ということ以上に、身体をめぐる問題というのは非常に大事で、例えば薬物の問題がある。東北大学でもオーストラリアの学生が持ち込んだマリファナ、大麻が留学生会館で発見されて大問題になったことがありました。加えて肥満、成人病の予備軍もいる。保健管理センターの教員が研究して尿を取って遺伝子解析すると、必ずこの人は将来成人病になるというのが分かるわけです。検査費用はかかるんだけれども、それも大学生に伝えないといけない。あとは性の問題があります。本当に学生同士でできちゃった婚のケースがある。女性の方が退学して親は怒って、男の子の親が挨拶に行っても家に入れてくれないというのもあります。これは性の情報がたくさんあるのですが、そういうことについての考えが不足している。

また、部活動は体育教員がなぜか専売特許で、行けば必ず顧問をやらされていろいろなものをやります。だから大学体育教員には、体育の授業を恙なくやるということ以外に、非正課教育において学生指導を行う、そういうスキルや専門性も求められているのです。そういう広い中で大学体育教員に求められる必要性と養成・訓練の大きなギャップをどう埋めるかというのが、中心問題だと思います。現状は経験による自己形成です。これは5、6年前に行った調査で東北地区の大学教員調査で、体育の先生も含まれていると思いますが、何が自分の力をつけるのに役立ったかという質問をしたところ、実際の教育をしながらだんだん一人前になっていったという話です（図54）。簡単に言うと、大学でやっているFDは平均より役に立たないということで、このデータは出したくありませんでした。

ですから、FDもやればよいというものではない。意外と大切なのは、学生時代に受けた教育、先生の姿を見

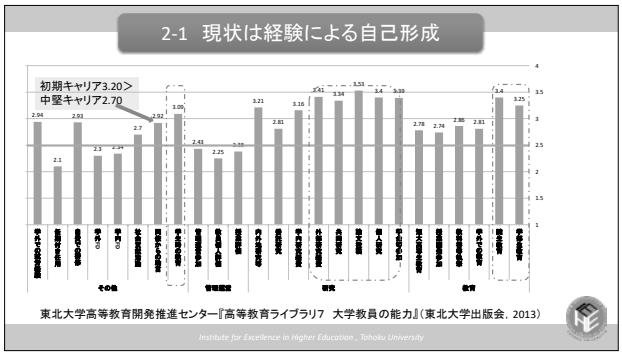

図 54

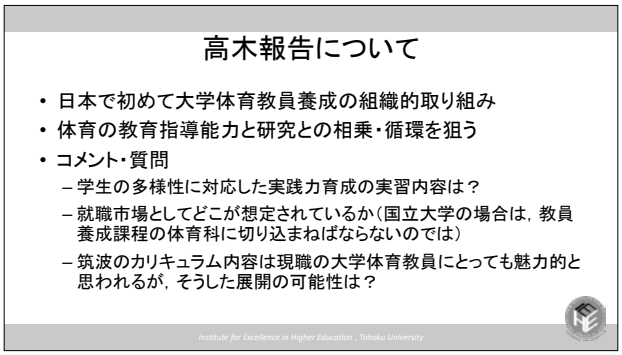

図 56

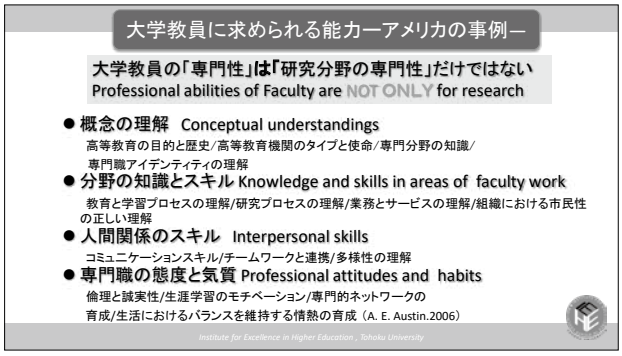

図 55

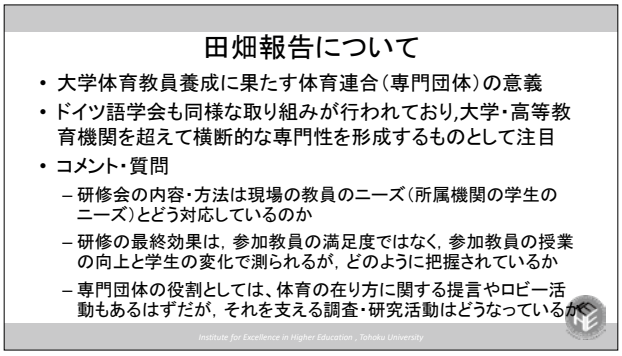

図 57

てそのやり方を取り入れて行う、ということが非常に役に立っている。大学体育の良い教育をそれぞれの体育研究の場で行うことが、その学生たちが後に大学に勤めた時に、良い体育教育を行える一つの条件になります。

そして同僚からの助言も非常に有効です。これは、教員の年代によって明らかに違っていて、初期キャリアは 3.2 で平均より有効です。中堅キャリアは 2.7、38 歳を過ぎると人のいうことを聞かないということかもしれません。若い時は人の話を聞いて成長するというのがよく表れている。こういった大学教員のキャリアの成長過程はそれぞれの分野においてきちんとしたデータを持つことが大切ではないかと思います。アメリカの場合でも、今言った通り大学教員の専門性は研究分野の専門性だけではない（図 55）。自分の勤めている大学では何かというと体育の専門的な研究知識や学生がどういうことを学ぶか、人間関係のスキル含めて、全体像を意識しながら全てを大学院でできることではないので、学部教育で大切なことや、勤めてから、ということを構造化してとらえていくべきだと思います。

そういう意味では、高木先生のお話は前にもお話ししましたけれども、日本で初めての大学体育教員の養成をするという組織的な取り組みで、教育指導能力と研究との相乗効果、循環を狙っている非常に大切な取り組みで、大学体育の世界全体において見守りながら成長していただいてその成果を皆で共有するというのが大事だと思います。

少し分からなかったのが、「実践力の育成をどうするか」ということです。私たちがずっと PFFP をやってきて、一番の肝は何かというと、先輩の先生の授業を見る、マイクロティーチングをさせるというのが一番実践力のコアになっている。座学的な知識というのは後からついてくる。そうすると、体育での実践力をどうつけるか。筑波大学のプログラムは、運動ができる優秀な生徒が集まっている中で行うのと、肥満傾向な生徒がたくさんいる中で行うのとでは異なる。だからいかにして実践力育成の場を作るかというのを少しお聞きしたいなと思いました。

加えて就職市場についてです。どのあたりを想定しているのか。これは国立大学でいくと、大体体育の専門課程というのはないですから、教員養成学部があるところは、教員養成課程の体育科の教員が非常勤と組み合わせで一般体育を行っています。そうすると高木先生のコースは、国立教員養成課程の体育科の教員になるというところで位置付けないと一般体育も出来ない。そういう専門性が必要になる。これの可能性、ロジックですね。本日は卒業生も来られているのでどこに就職しているか分

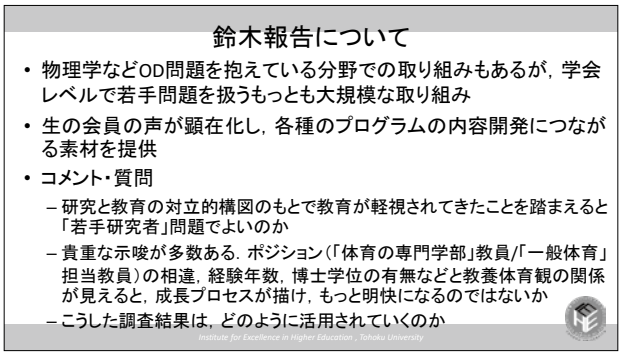

図 58

かりませんけれども、そこが非常に課題かなと思います。

また、筑波のカリキュラムを筑波だけにとどめておくのはもったいないのではないかと思います。よりオープンにして大学の現職教員たちが聞ける可能性はないのだろうか。

田畑先生の報告も、大学体育教員養成に対する体育連合の意義というのは、非常に良く分かりました。学会においてはドイツ語学会がこういったものに取り組んでいます。あまりその他の専門学会でやっているケースは聞きませんが、大学を超えて専門性を育成するという大事な取り組みと思います。

3 つほど質問があるのですけれど、やられている研修の内容、方法は現場のニーズとどう対応しているのかよく分からない。つまりさっきのケースでも、実技だけやっても駄目だという話があります。最初に言ったように、健康教育的なものや現場の教員や機関の学生のニーズとこの食い違いはどういった対応をしているのだろうかと思います。ここをもう少しお聞きしたい。

加えて研修の効果については参加者の満足度で測っていますが、それはゴルフをやって楽しかったという類のものである可能性があります。効果を測るのであれば、参加教員の満足度ではなくて、その結果、参加教員の授業がどう変わったのか、それが学生にどう影響を及ぼしたのかというところにまで調査をしないと、研修の効果は測定できないわけで、これについてはどう考えておられるでしょうか。

さらに体育の在り方についての提言、ロビー活動について、文科省の体育局にどう働きかけるかとか、研修会以外にもそういった調査結果がどう使われているのかをぜひお聞きしたいです。

最後に鈴木先生の方ですが、学会においてこれほど若手問題を取り扱っているのは例がないと思います。物理学や数学など OD 問題を抱えている学会は結構やるのですが、比較的単発的、短期的です。それから、各種のプログラムの内容開発につながる素材を提供しているのは、とても重要と思います。そのうえで少し意地悪な質問になりますが、研究と教育の対立的構図があり、なかなか大学教育が位置付かないという中で、若手研究者というフレーズで良いのだろうか。問題は教育ですから、教授能力が焦点になっているのに、若手研究者というのでは、研究中心を前提にしているように受け取られます。うまいフレーズがないでしょうか。

貴重な示唆が調査にはたくさんあったのですが、体育の専門学部の教員と一般学部の体育教員が混在をしているように思います。これはかなり違うのではないでしょうか。年齢、経験に相当幅があるにもかかわらず一緒になっています。博士学位の有無とかそういう要素がどのように教養体育に連動しているのかということを考えると、年齢や経験を見るだけでも、大学体育教員の成長プロセスを描くことが出来ます。そういった処理の仕方をした方が明快になるのではないでしょうか。

最後にこういう調査結果をどのように活用されていくのか、体育連合の方でもおそらく参考になるし、筑波の方でも関係すると思います。全体への共有をどのようにするかということが今後の課題ではないかと思います。以上です。

村山：羽田先生ありがとうございました。短い間にお三方に具体的な質問もスライドにもしていただきました。そのことも踏まえてお三方が答えるということだけでなく、フロアの方にも、それに対してはこうではないかという意見が出せるのではないかと思います。これから前に席を作りまして、フロアを交えてディスカッションをしたいと思います。

全体討論

村山：お待たせ致しました。それでは残りの時間、羽田先生のご意見も参考に議論したいと思います。質問にもありましたように、大学体育連合が研修会をやっている意味って案外当たり前にやっているが、結構問題もあるのではないかと思います。研修会に人が来て実際の効果をあげないとしょうがないということもあるのですが、お三方の中で大体連を「こういう風に活用できるよね」というところを、まず最初に、この共催シンポジウムとして考えていきたいと思います。高木先生、実際にカリキュラムとして筑波と鹿屋で動いているというところで、大体連の中でやっている研修会との関係性や発展性、そしてもっと大体連はこういうことをしないといけないなど、そういったところにご意見を伺おうと思います。

高木：はい。筑波のカリキュラムの中でやっている授業でも、授業を研究するような、結構外に開いておりますので、そういった授業研究を実際には大学生を対象に模擬授業をやったりしているところに、大体連とタイアップして、来て頂いて、一緒に学んで頂くということは可能ですし、我々としてもそういうことを望んでおります。つまり、羽田先生のところから筑波の中で閉じておくのは勿体無い、まさに我々はそういうことを考えております。我々は所属する大学院生のためではなくて、そういったことを、大学体育をより良くしていこうと思ってらっしゃる同志の方とも一緒に大学体育を改善していきたいという思いがあります。木内先生という方が理事にも入っておられますので、木内先生を通じて、筑波でやる授業改善に関するプログラムを少しオープンにして大学体育連合の方にも参加していただけるように出来たらいいなと今日改めて思いました。

ディスカッションの様子

村山：羽田先生の方からは実際に研修、実践を通して実戦力をつけていくという仕組みについてもう少し工夫が色々と必要なのではないかと。大体連の方も教員評価、研修を受けて、教員がちゃんと向上したのかどうか評価しないといけない。そこに例えばニーズが合っているかどうかとか、研修をそもそもどう組み立てていくかとか、田畑先生、その辺は今年特に佐渡でやってみてどうですか？

田畑：今回佐渡島で実施したというところですが、関東支部というのが、支部の区分けというところで東京から始まり山梨も守備範囲ですし、茨城で、新潟まで関東支部というところがありまして、長年我々のところで全国研修会を見て来た時に、やはり参加者をいかにして集めるか。しかしながら、参加するには「どうせ研究費使ってくるでしょ？」というような位置付けもありますので、じゃあ行ったこともないようなところで大学体育を考えてみるというところで、佐渡島という開催地を設定したわけですけども、やはり案の定、佐渡という土地で実施した時に参加者が少なかったという現状から見ると、ニーズには即していないのかなというところが1つの反省点ではありました。羽田先生からあったように、ニーズをどう測るかというところで、多分福士君が研修部にも所属していると思うので、どういう風に研修部で話をされているのかというところでもしあれば紹介していただければと思うのですが。

福士徳文（慶應義塾大学）：慶應義塾大学の福士です。研修部の方でどういう風に種目を決めているかというと、過去の開催の回数だとか、ここ最近開催した種目の傾向だとか、アンケートなどの調査を進めながら設定はしていますけれども、先ほど出たようなどのようなニーズで、というところ全てに対して対応出来ているかどうかというのは、難しくもあり、今後の課題でもあるのかなと思います。

田畑：急に振ってすみませんでした。羽田先生のご質問のところであったように、アンケート結果のところで満足度というよりも、どう授業効果が出たのか、続き調査

のところについての回答ですけれども、これはまさに大体連もやる必要がありますので、このシンポジウムを経て研修部長の北先生にぜひ伝えて、そういった調査をするように言っておきます。以上です。

村山：もしフロアからもあれば手を挙げていただいて結構ですので。今のところですね、育成の何か仕組みが全くないわけではなくて、まさに筑波で、高木先生がおっしゃったように何かお手本、真似ができるようなものが出来そうだということで、この渦を作って、色んなところでそういう場を持つということは全然異論は無いと思います。しかし実際に今のように、じゃあ何を研修するのか、我々は今まさに大学の中にいて次に、大学の中でも研修しなければいけないという話がありました。一体何をコアにして育てていくのかというようなところが、実際に若手の方々が思って入ってくることと、今我々が思って現場でやっていることをうまくマッチさせる必要があるかと思います。その辺で、ニーズだと言いますけれども、こちら側にも大学にこういう課題があるんだと、まさに大学の教員としてやらなきゃいけないことの難しさなどをうまく伝えるという意味では実技の研修だけじゃなくて、大学で働くということをよく分かってもらうような仕組みもそこに乗っかっていかなければいけないと思います。就職の市場の先としてこちらもどう考えるか、それを要請する時にどこにターゲットを置くかというようなことになってくるのではないかなと思うのですが。鈴木先生、その辺、率直に、若手は実技の方を目にして、それが必要なんじゃないかとか、いらないんじゃないかとか、と言っていると思うのですが、今回のアンケート結果も実務を執っている人たちですよね。実際に大学で働くことに対する難しさとか、その辺はどうですかね。

鈴木：私が考えていたところと違う質問だったので、なかなか答えが難しいのですけれども、自由記述の内容を見た時に、やっぱり教養体育の意義ってそもそも何なのかをみると、実際になろうとしている人、今担当している人の回答として、自信がないというところがあるので、大体連の研修制度もそうなんですが、例えば、教養体育学という学問があったとすれば、ハウツーに関しては研修等で出来たとしても、実際の学理といいましょうか、教養体育学という実習、演習はシラバスでは何を目標にして、どのように書くべきなのかというところの、なので最後のスライドにガイドラインと書いてあるのですけれども、何か道しるべがあれば、それを博士課程を修了して研究ばっかりやってきた方かもしれませんが、能力は高い方々なので、そういうガイドラインとかがあるとすれば、それを軸にして、色んな工夫というのが出来ると思うのですけれども、それ無しに「こうやると授業評価上がるよ」とか、「こういう風にすると技量は上がるよ」とか「出来るようになるよ」っていうようなハウツーだけではなくて、本当にそういうこと、もちろんどういうやり方でも、スポーツという題材は魅力があるので、授業評価自体には大きな変化はないような感じもするのですけれども、そこの軸足というか、その辺りを、勝手に言えば、若手の20代の気持ちになって言えば、作ってもらえたらそれを参考に色々考えることができるのだけどって。でもそれをどうすればいいのかというところで大体連は重要な役割を果たしていると思いますし、体育学会ももちろん重要な役割を果たしていると思うので、特にハウツーの部分に関しては、研修の参加に関しては、まさにネット配信とかで、そういうのが進めば、いくらでも情報は入手できて。今私の研究室でも幼児体育の運動遊びとかしていますけど、大学院生とかは、もう行く前に「さあ来週どうしようか」っていってYouTubeで「何とか遊び」って検索して、「あ、こんな遊びがある」って大体のことは色んな方が情報を発信しているので、ネットで調べると出てくるんですけど、同じように教養体育のハウツーに関しても、そういうものは最低限の発信が出来るといいのですけれども、それ以上に学理というか、そういうところの軸足というか、本当にこういう教え方、これを教える、教え方については色々あるんですけれども、何をシラバスに書くべきか、というそこを知りたいなと思います。それがあるとすれば是非発信してもらいたいなと感じています。

高木：まさにその切実な思いで教養として教える体育の内容って、実は我々はずっとそのことを議論しておりまして、我々最近ようやくそのことに気づき始めたのですが、これは世代によっても違ってきて、今大学で教養体育を受けようとしているのは、我々の世代ではなくて、18歳のいわゆるデジタルネイティブで、人とあまりコミュニケーションを上手く取れず、身体活動というのも非常に二極化している、ものすごいやっている人と、や

っていない人が混在している学生に我々が教養として何を教えるか、というところをやっぱり考えなければならないですね。これがどうも世代によって身体に関する感覚が、僕らなんかは生まれ育った時には体を動かすのが当たり前だったので、それを敢えて教える必要はないという風に思っている世代もいるのですけれども、今の学生を見ると、まさに教養として、何を教えるか。英語だったら英語を通してコミュニケーション出来る能力を教えますよね。我々が今、大学生に教えなければならないのは、自分の体を通して、人と、いわゆる共感力と言いますか、自分の体がまずどうなっているのか、これ恐ろしく、そういったことに対する意識が低いんですね。自分の身体性っていうのが。多分薄々感じてらっしゃる、いわゆる運動が苦手とかそういうこと以外にですね、自分の体に関する興味が非常に低いですし、コンシャスと言いますか、意識できるという能力が非常に低い。そうすると、他人の運動を見ていても、その共感力が非常に低いんですね。そういったことを我々はやっぱり、運動学習のプロセス、これは非常に狭めて言うと運動学、マイネルのなんかがあるんですけれども、それに狭めるわけではなくて、運動学習っていうものは、これは今大学に、特に高等教育と呼ばれる、その社会の中でリーダーとなって共感力を得て、人と一緒に仕事をして行く、そういう立場になる人こそ、やっぱり自分の体と人との体を通じたコミュニケーション能力を養う時に、じゃあいきなり、バドミントンだけではいけないと思うんですよね。バドミントンをやる中で、自分の中で、「あ、体がこういう風に使えてる」、で、あまり上手でない人と一緒にやる時に、どういう風な、「あ、今、相手側はこのレベルにきているんだな」というようなことは共感できる、まさに教養、だと思うんですね。何も種目に左右されることはなくて、もう一回体育でしかできない運動学習、下手だったとしても、段々できるようになる…で、出来ると上達する時に一回出来なくなる。そういうような移送の変化を学習させるというようなことが、特に高等の大学生になった時に、大学で半期を通して同じ種目をやったりすることが多いですよね。そんな中で、自分の体のこと、それからそれを通して、他人の変化を読み取れる共感力というのは、コアに置いてそれが出来たかどうかを評価すると、単になんと言いますか水泳で言えば何秒で泳げるようになったかよりも、もっともっとそれはスポーツクラブでは教えられない内容ではないかと。ただその為にはですね、教える方の技量がやっぱり大事なんですね。自分が卓球をやっている中で、卓球って多分ここでつまずく、つまずくとその先にはどういうことが待っているか、ということを予想できるような教える側に技量が無いと、それを超えさせて、その先の達成出来る喜びを味わせてやれないので、ラケットとボールだけ渡して「はい、やれ」って言ったんじゃ、それはもうなかなか授業にはならない。すみません、長くなりましたが、今我々もずっと悩んでいてちょっとそれは正解では無いですね、ただ行き着いているところはもう一回、体育の本質、運動学習の教養として学ばせるということは大事なのではないかなということを考えております。以上です。

村山：ありがとうございます。羽田先生の方からも先ほどありましたように、いわゆる一般教育として考えると、体育をベースにして、その先に大学において何があるのかというような問題がある特別な科目とのことでした。単発でそこで終わってしまい、だけど満足度が高いっていうことに、居心地が良いからそのままにしてきているというのは確かなことなのではないかと思うんですね。今のようなことで実際に我々は体育という科目の名前をもらってますけれども、自分が学生と対峙してどのように教育をしたいか、何を学生に学ばせたいかというようなことを、真剣に考えて、それを同じステージの中で議論する、というようなことを忘れているのではないかというような感じを受けます。どうでしょう、フロアの皆さま、日常的に体育をされているか分かりませんが、その辺、そもそも体育の意義をこんな風に考えているとか、それが結局若い人に、これからの人にも、こんな風に伝わるべきなんじゃないか、みたいな意見を頂戴できるといいかなとも思います。逆に若い人で、私はこんな風に体育を捉えているんだよ、というようなことも良いと思うのですが、あまり時間もありませんので、フロアの方からもいかがでしょうか。

山中（筑波大学）：筑波大学の山中です。僕は体育の意義っていうのはやっぱり、体育でしか体を動かさない、なので身体知を形成するっていうところにはかなり大きな意義があると思っているのですけれども、特に僕の研究では、水泳というところに目を向けていて、その水泳でしか水の中で浮いたり、沈んだりっていう感覚は養え

ないと思っているんですね。これはやはり自分の身を水中で守ることにかなり繋がると思っていて、その能力を教えて、その学生が水中での身の守り方を学習するということが、教養につながるのかなと思っているのですが、先生方はいかが考えられますかね。僕の博士の研究の課題の1つでもあるので、アドバイスいただけたらいいのですが。

村山：どなたからでも、フロアからでもご意見があればどうぞ。

鈴木：私、答えじゃないですけれども、重ねて質問を。私専門じゃないんで、ぜひフロアの先生方をはじめ聞きたいんですけれども。スキー実習いる？　と言われた時に、なんて答えるのか。ゴルフはもう授業も多いから、ちょっと科目数減らすのにゴルフ、いらないですよね、どうします？　って言われた時に、「いや、これこれこういう理由で絶対必要です」っていう、何て言うのかなって。もっと柔らかく言えば、それぞれの種目のシラバスに何を書くのが正解なんだろうかっていう、実技の科目にですね。そして種目は違うけど同じことが目標になってるのか。別の言い方をすると、スポーツを学ぶっていうことが目標なのか、スポーツを通して学ぶっていうことが目標なのか、その時に何を、スポーツを学ぶだったらスポーツを学ぶ。スポーツを通して学ぶだとすれば、スポーツを通して何を学ばせたら、大学の授業として正解なのか。

小林雄志（岡山大学）：岡山大学の小林と申します。正解が僕も分かるわけではないのですけれども、多分大学の教養体育って結構いろんな目的で実施されていると思うんですよ。僕が思う正解は、その大学のディプロマポリシーに沿って、体育の授業がこういう風になっているという風に、書いたと思うんですよ。それを実践するために、やらなきゃいけないということを、書くかどうかってのが正解だと思うんですよ。だから大学によって、そのシラバスの内容とかは異なると思っていて、多分そうとしか言いようがない気がして、いろんな目的でいろんな先生、いろんな専門の人がいろんな想いを持ってやられているというのが現状だと思います。そこで必要だと思うのは、鈴木先生が最後のスライドで出していたガイドラインとか、こういう目的の場合はこういうことを教えなきゃいけない、とかのモデルの授業とか、そういうのがある。

鈴木：教員見習いの1年生、2年生からしてはそういう目安が欲しいかなと。

小林：例えば、コミュニケーション能力を養成するという内容を目的とするのであれば、こういう教え方をして、こういう評価をして、というのをどこかには示さないといけない。多分それが大学体育連合とかが、そういうガイドラインとか作って出すということはできるのかなと思います。目的がコミュニケーションとかだけではなくて、将来にとって健康のために運動を続けるようにさせるためにっていう目的であれば、それ用のというように、何種類かモデルというか、ケースがあって、それを示してあると、「あ、こういう場合はこういう教え方をしなきゃいけない」っていう。今の研修会っていうのは、ある種目があって、その種目のスキルを教えるっていう研修会になっていると思うので、その種目を通して、コミュニケーションを伸ばすにはどうしたらいいのか、とか、そういうところが乗っかってくると、もうちょっと発展していくのかなと思っています。あともう一個、最近発見したんですけれど、九州の方で、大学教養体育の授業担当資格認定に向けてというそんな議論がされているようで、例えばそういう動きなどについて、羽田先生は、例えばその PFFP とか大学新任教育プログラムというのをやったかと思うんですが、そういう授業に対する研修とか、認定プログラムみたいなものについてはどうですか。こういうのは、どう思われますか。

羽田：私たちが東北大学でやったプログラムも基本的には認定プログラムで、これは1年間かけて、学習時間100時間くらいで作っています。それで、OB/OG も出て、大学に就職し、助言者になってあげるという循環は出来ているんです。就職活動をした時は、PFFP だって履歴書に書くと面接まで行けば、だいたい質問してくれる。とうとうと説明して面接者は感心したと聞いています。それが理由かどうかわかりませんけれど、採用にはですね、成功しています。カナダにも何回か調査に行っているのですが、カナダではそういうプログラムを受けたら、優先的に採用するというルールも段々大学の中では浸透しているので、これから出来てくると思うんです

ね。

ただ、安易な資格認定でも困るので、学会が連合してきちんと、大体連とか、日本体育学会が連動して、ガイドラインなりのものを作るのがいいのではないかと思います。

しかし、今の話でディプロマポリシーは、大学教員が色々議論しながら作っていくので、下から今言った身体知の問題を位置付けるとか、そういう話が上がっていって、ディプロマポリシーになるのであって、どっか天から降ってきたディプロマポリシーがあっても、あまり役に立たないんですよね。僕も東北大学の作りましたけれど、11 も学部があって、全部埋め込められないから、適当に丸めて書くんですけれど、あんなもので実際のシラバスは出来ないので、要はおまじないみたいなものですから、むしろ体育教育の現場から出てくるロジックの方を大事にした方が私は良いのではないかと思います。

小林：ありがとうございました。

村山：時間も無くなってきてしまいましたけれども、フロアの方からまだご意見など如何でしょう。はい、どうぞ。

稲見崇孝（慶應義塾大学）：慶應義塾大学の稲見と申します。ありがとうございます。高木先生と鈴木先生にお伺いしたいのですが、今回のシンポジウムのタイトルが、「大学体育教員の育成」ということを、何となくお話を聞いていると、少し若手にフォーカスされているような印象が全体的にあるのですが、これが限られた大学教員の育成ということではないと思うんですけど、仮に若手だとした時に、高木先生にお伺いしたいのは、筑波でやられている取り組みが、色々要素が入っていて、グローバル化も含めて入ってらっしゃると思うんですけれども、実際にまだ若手のポジションを獲得していない学生からすると、仮に入って、うまく入れた後に、任期ありで入った後に、評価される、育成の後に評価されるのが、英語の論文であったりだとか、授業を何個やりましたかというよりは、比較的研究の要素に日本の全体的な大学の評価が置かれているような気が私はしているのですが、そういった時に、少し実践的な研究、実践的な教育となった時に本当に 3 年で良いのかという点を後でお伺いしたいと思っています。鈴木先生には、どちらかというとそういう若手の、先ほどの昇進の評価の時に、現実的な若手ばかりの飲み会では、どこかの大学が公募出るよとか、そういうのは結構現実的で、どちらかというと雑務が評価されずに、雑務をあまりやらずに研究している人が比較的残ったりとか、っていう声をちょっと聞いたことがあるので、若手の教育を考えていく時に、どういう風に評価されているのかというのを、いろんな大学から吸収していくようなことが、取り組みとしてあるのかっていうところをお伺いできると嬉しいです。

村山：簡単にちょっとコメントをいただけますか。

高木：はい。おっしゃる通りで、研究という、特にペーパーを何本書いたかっていう非常にクリティカルになります。ですので、3 年としているのは、やはり最低限の、先ほど言った運転免許を取るために必要な年限でありまして、これが必要十分であるとは考えておりません。ですので、うちの学生にも、基本的には一本査読付きの論文が通れば、博士論文は書けるのですけれども、その先就職するためには論文が必要ですので、当分英文で、それは博士課程でやってきたことを英語の論文にして出していく。それらのことは、別途をしないと当然、なかなか職を得られない。あと、現職の先生の方も多いので、そういった方はやはり、最低限度で取れるっていうことが一つの魅力になりますので、3 年は目安としていて、そのために新たにポジションを得るためには追加の論文を英語で書く、ということですね。

鈴木：私の立場で何を答えたらいいのか難しいのですけれども、若手の中で情報交流というのを、今の形ですとメーリングリストがありますので 450 名を超える若手の方々が。その中には隠れ若手もいるんですけれど。年齢は制限していないのでメーリングリストに。なので 40 をはるかに超える方もいらっしゃるんですけれども、そういう中で本当は 450 人の LINE があったら良いなと最初は思っていて、一応若手研究者委員会の 15 人の中では、「こんな非常勤探しているらしいよ」とか、そういう情報は流したりはあったりして、それをもうちょっと、ざっくばらんに意見交換を出来る。今時はもう対面じゃなくても、そういうので出来るので、そういうことで情報をどんどんお互いにシェアしていく中で、「うちはこうだよ」とかみたいのをやっていけば良いのかなとは思っております。場合によってはそういう、シンポジ

ウムというかセミナーというか若手の会合みたいのを学会のイブニングセッションみたいのを設けて意見交換できればなっていうので。実は横浜スポーツカンファレンス2020のところで若手のお題として、上からは若手の、海外からの若手も含めた交流の場を考えて、っていうことで、今動きはしておりますので是非そこで交流ができたらなと思いますのでよろしくお願いします。ありがとうございます。

村山：はい。予定していた時間を過ぎてしまいましたけれど、今回はですね、羽田先生に議論の束ねをうまくしていただいて、色々話しているうちに、こちらも考え直すところがかなり出てきていると思いますが、最後に羽田先生にコメントをいただきたいと思います。いかがでしょう。

羽田：ありがとうございます。私もともと東北大学の仕事が一般教育、教養教育の解体後の組織だったので、ずっと12年間、いわゆる教諭教育のいろんなマネジメントなどのデータを見てきたんですけれども、一つ評価の問題では、私の属した組織の昇進の制度を作る時に評価基準を作ったのですけれども、研究だけでは上げない。研究と教育と社会貢献と管理運営。つまりその中には自分の研究だけじゃなくて、同じ組織の中で皆と一緒に楽しくやって水準を引き上げる、特に教授はそういうリーダーシップとかを入れて。で、准教授の昇進について言うと、教育で優秀であれば良いとしました。確かに勿体無いですよね。しかし教育で優秀な人を何て説明するかって非常に難しいので、そこは教育に関するレポートとか、教育を対象にした論文とか、それから新しい教育方法の開発とか、そういうところを評価基準に入れて、もうすでにそれで動いています。だから、大学はもう研究だけで、実は研究大学でも評価して昇進させないという風になっています。確か採用については研究能力というのは色んな発展性を持つ目なので、そこはやはり入職の時は研究能力って非常に見ますよね。で、入れば、皆の手助けもしないで論文ばかばか書く奴は絶対に昇進させないとは言わないけど、そういうものも一応あります。それから、その現場で見ていると実技科目中心の体育ってもう行き詰まっているなというのが正直なところで、例えば、医学部に配置されて一般体育もやるんですけれど、今度は新しい人を採る。だけどその人はバドミントンしかできないとかね。サッカーも教えてテニスも教えないとならないので、テニスは1年間頑張ってやらせる、などと採用する人が言うんだけれど。そういう科目ってどう思います？　それよりも高校でもってテニス部の部長やってた人のほうが、もっと上手なわけですね。だから、科目自体がどんな科目が良いかってことも洗うべきだ。で、東北大学で一番人気は合気道なんですよね。先生が自分で勉強してやった合気道やったら、それは外国人留学生は大喜びで参加しているわけです。それからダンス。この授業はものすごく人気があった。という風にですね、今の学生のニーズと教員たちが学習して取得したスキル、科目と対応していない。だから就職してからそういう風なものを開発するっていう仕掛けをどう作るかっていうのが、多分大きなところになるのではないかと思います。それから今日全く議論出来ませんでしたが、これから体育の中で考えなければいけないのは、差別解消のために色々な学生が入ってくる。聴覚障害のような学生が入った時に、体育をどう位置付けるかっていうのがかなり大きな問題ですね。免除だけでもダメだろうと、危ないですよね見えないと。それに対する対応をどうするか。それからLGBTはこれから大きくなると思います。性同一性障害を抱えている学生はだいたい統計では18％いると言われている。だから男性に入れられてプールで水着になるのは嫌な生徒は相当いると思うんですね。こうしたことへの対応がほとんど顕在化していません。宮城県の宮城女学院っていう女子大学が二人、男性として生まれた学生もそこに引き受けることにしたんですね。このように本来の自分の生徒を、生理的なものとズレを感じて苦しんでいる学生も相当いるっていうことを考えた時に、これから体育はその問題に一番直面しますね。これはどこかで検討していく必要があるのではないかということを考えて、体育には課題てんこ盛りなので、研究のしがいがあるな、という風に思いました。どうもありがとうございました。

村山：はい。先生ありがとうございました。テーマから言うと育成のシステムの話を体育学会から比べようということだったのですが、羽田先生にお話しいただいたように、そもそも大学での体育の意義とか、コンテンツとかを相当我々は考えていかないといけないということを再認識しました。それが若い人たちと共有出来て、新しく大学の教員になってもらうというところに、我々は

今そちらに職を持っていますので、そちら側からちゃんとアプローチしないと未来がない。ということで我々大学の中にいる方にかなり責任はあるわけでありますけれども、これを共に私たちとニーズに合ったものというか、次世代のものを作っていくということが、依然課題であろうと思います。ただ今回鈴木先生を中心に若手の会の方にもそういった意識とか、問題の顕在化をいただいたので、特にシラバスの書き方みたいなことですら、十分に議論が出来ていないということに対して、例えば慶應大学でインターンシップの枠を持って大学院生とかと一緒にやれる機会があればいいんじゃないかなと、簡単に考えていましたけれども、そこでどんなコンテンツがあって、こちらがどんな準備が出来るかっていうことは、次の具体的な課題になると思います。そういう場を作ろうということでは、今回このお話を聞きに来ていただいている方は全然前向きだと思うのですけれども、まだまだそうは言っても体育学会で声をかけてもですね、そういったことに興味を示さないというか、それを重要だと思ってくれないところで、実は大体連もですね、フォローになりますけど、「シラバス研究をしよう」ということをずっと言っているんです。これは結局大学のある種の個人情報とかに介入出来ないと。それが無くして、調査もしないで、「これが良いシラバスだ」って出来るのかと、いうようなことでずっと頓挫しているんですね。そういったことも苦労としてあるので、やっぱり学会みたいなところと一緒になって、きっちり考えていくこともシステムとして必要なのではないかということを今日再認識しました。こういったことで若手の繋がりで、人材バンクみたいなものを持って、大学体育に本当に興味のある人たちが、前向きに相互作用で活性化出来るような場を作ろう、と私は思っているのですけれども、まだまだ課題山積という風に羽田先生からいただきましたので、今後もこれを共に考えていきたいと思います。拙い進行で申し訳ございませんでしたが、時間となりましたので、今後また機会を設けてご協力いただきたいと思います。本日は皆様、本当にありがとうございました。

2019 年度
慶應義塾大学体育研究所基盤研究シンポジウム
「大学体育教員の育成を考える」報告書

2020年3月31日発行
編集・発行　慶應義塾大学体育研究所
代表者　石手　靖
〒223-8521　横浜市港北区日吉4-1-1
TEL　045-563-1111（代表）
https://ipe.hc.keio.ac.jp/
制作　慶應義塾大学出版会
印刷・製本　株式会社太平印刷社

©2020 Keio University Institute of Physical Education
著作権者の許可なしに複製・転載を禁じます。